

明治九年二月

定價五十八

改正 增補 物理階梯

文部省

改訂

138  
170  
1.  
東京  
三

改正 增補 物理階梯 緒言  
余嚮ニ文部編輯寮ニ在テ此書ヲ草スルニ  
紙數ヲ限リ要ヲ摘ミ綱ヲ提ケ以テ一編ヲ成  
ムト期ス故ニ上卷物性論ノ如キハ極メテ簡略  
ヲ主トシ既ニシテ中下兩卷ヲ草スルニ當リ事  
片句隻章ノ盡スヲ能ハサル者多キヲ以テ紙數  
漸ク其限ニ過キ之ヲ上卷ニ較フレハ詳密ニ涉  
ル者尠カラス終ニ精麁詳略前後其體ヲ異ニス  
ルニ至ル因テ竊ニ惟フ更ニ上卷ヲ改メ其體ヲ  
シテ一ニ歸セシメムト會編輯寮廢セララル

改正  
緒言

以テ其志ヲ果スコトヲ得ス刊布ノ後取テ之ヲ  
 讀ムニ黥竄未周ネカラス校讎未精シカラス殊  
 ニ誤寫誤刊事實ヲ失スル者亦多シ恐クハ幼學  
 ヲ誤ルニ至ラムトテ故ヲ以テ更ニ增補改訂セ  
 ムトテ文部省ニ請フ昨甲戌ノ秋ニ至リ始メテ  
 其允許ヲ得テ欣然筆ヲ採リ隨テ校シ隨テ改ム  
 是ニ於テ乎精慮詳略少シク其宜シキヲ得ルニ  
 庶シ然リト雖余ノ剪劣固敢テ之ヲ完璧ト為ス  
 ニ非ス因テ告ルニ再版ノ由ヲ以テス

明治八年乙亥第四月

片山淳吉誌

改正 增補 物理階梯

題言

一 國家小學ヲ設ケ兒童ニ教フルニ中外ノ歴史  
 ヲリ物理數學等ノ各科ニ至ル諸書ヲ以テス  
 故ニ西籍ノ未譯ヲ我ニ經サルモノ編輯寮中  
 諸人ニ命シ翻譯ノ業ニ就カシム而シテ余モ  
 亦叨ニ其員中ニ在リ因テ竊ニ謂ラク方今物  
 理書ノ既ニ翻譯ヲ經テ世ニ刊行スルモノ其  
 類乏シカラスト雖或ハ其區分ヲ混シ或ハ  
 講論繁冗ニ過キ兒童ノ課業ニ供ス可キモノ

希ナリ此ニ於テ自、掃ラス西籍中ニ就キテ其  
 簡約ニシテ明晰ノモノヲ索メ之ヲ譯セント  
 欲セシニ適英國學士パークル氏小學生徒ノ  
 爲ニ纂輯シタル千八百七十年刊行タルスト、  
 シソン、イン、ナエラ、ル、并ロソビ、ナルモノア  
 リ即之ヲ譯スルキハ物理初歩トモ稱スヘキ  
 ニ近ク篇中記スル所僅々物理ノ一端ヲ示ス  
 ニ過キスト雖ハ物體、物性、物ノ定則、ヨリ器械  
 視聽、水火、電氣、磁石、天文等ノ論ニ及フ迄凡ヘ  
 テ物理ニ關スルモノ其梗概ヲ舉ケテ遺ス所

ナレ因リテ今其書ヲ譯シ以テ小學課業ノ讀  
 本ニ供スルモノトシテ其價廉  
 一 此書ハ然トクル氏ノ原本ヲ主トシ之ヲ譯ス  
 ルト雖ハ嘗テ先輩或言ク聞クニ米國學士ク  
 エウケ、ホス氏ノ格物書ハ區分其宜キヲ得テ  
 條緒明晰ナリ然レ因リテ物性順序ノ如キハ今  
 一 此物トクセボス氏ノ書ニ從ヒ且原本中其  
 文辭簡約ニ過キテ隔靴ノ憾ヲ免ルルモノ  
 一 傍ラガ物トクセボス氏ノ物理書ヲ抄譯シ以テ增加  
 スル所ナリ然レ其原文ノ意ニ違フヲ恐レ敢

テ己ノ意見ヲ其間ニ攙入セス  
書中尺度權衡ノ如キハ皆我邦制ニ改算シ以  
テ幼童ニ了解シ易カラシム然レ幾時幾分時  
幾秒時ノ如キハ之ヲ改算スルトキ却テ其煩  
ヲ生ス故ニ今原書ニ從ヒ之ヲ譯シ且人名國  
名物名等其字傍ニ單雙ノ柱ヲ施シ之ヲ區分  
スルモノ一ニ寮中既ニ刊本ノ定例ニ因ル  
一譯字ハ總ヘテ博物新論格物入門氣海觀瀾等  
先哲撰用ノモノニ從フト雖モ或ハ其創見ニ  
係リ譯例ニ乏シキカ如キ若シ原語ヲ存シ註

釋ヲ加フルトキハ幼童ノ爲メ亦誦讀ニ便ナ  
ラサルヲ覺ユ因リテ姑ク之ヲ填スルニ原意  
ト相類似スル字ヲ以テシ其欠ヲ補フ然レモ  
余ノ淺陋偏ニ恐ル文字ノ妥當ヲ欠キ旨趣ノ  
明晰ナラサル所アルヲ冀クハ看者其意ヲ諒  
シ訂正ヲ加ヘナハ幸甚

明治五年壬申晚夏

片山淳吉 誌

[Faint, illegible text, likely bleed-through from the reverse side of the page]

改正增補 物理階梯目次

卷之一

總論

第一課

物體論

第二課

物性論

第三課

- 填充性
- 無盡性
- 定形性
- 習慣性
- 礙竄性
- 分解性

氣孔性  
受壓性  
膨脹性

運動性  
引力性

第三課

偏有性

凝聚性  
粘着性  
堅硬性

柔韌性  
彈力性  
碎脆性

受展性  
應抽性

第四課

動靜及速度力

第五課

運動力論

第六課

單動及複動論

第七課

重心論

第八課

運重器  
槓杆論

第九課

滑車論

第十課

斜面、楔及螺旋論

第十一課

摩軋論

第十二課

靜水論

第十三課

水壓論

第十四課

諸體本重

第十五課

流水論

卷之中

第十六課

大氣論

第十七課

大氣ノ壓力ニヨリテ驗氣器及驗温器ヲ

製スル法

第十八課

空氣ノ礙性及壓力論

第十九課



音響論

第二十課

音ノ速力論

第二十一課

溫熱論

第二十二課

溫ノ反射及顯溫潛溫論

第二十三課

光論

第二十四課

光ノ反射及ヒ陰影論

第二十五課

照子ノ光ヲ反射シテ物像ヲ映スル法

第二十六課

光線屈折論

第二十七課

各式玻璃鏡光ヲ屈折スル法

第二十八課

眼目視法論

第二十九課

物色及虹霓論

卷之下

第三十課

電氣論

第三十一課

電氣ヲ發生セシムル方法

第三十二課

電氣ノ作用論及ヒ富蘭克林氏風鳶ヲ放  
テ電氣ヲ引キシ話

第三十三課

磁石論

第三十四課

大體論

第三十五課

黃道及ヒ獸帶論

第三十六課

四季論

第三十七課

大陽及ヒ恒星論

第三十八課

游星論

第三十九課

日食月食論 附 閣龍氏月食ニ因テ急難ヲ免レシ話及ヒ潮汐論

目錄終



改正物理階梯卷之上

總論

凡テ覆載間ニ在ル所ノ萬物ノ外面形狀ヲ記載シ以テ其類別ヲ詳論スルハ博物學ノ要ナリ、萬物ノ性質及其物質界中ニ生スル諸變化ノ原因等ヲ説明スルハ物理學ノ要タリ、故ニ博物學ノ王トスル所ハ動植金類ノ形質ヲ類別シ以テ其異同ヲ徴シ、物理學ノ主トスル所ハ萬物何ヲ以

片山淳吉



テ形體ヲ成シ、諸動何ヲ以テ運行ヲ起スト、一々其理ヲ窮ムルニ在リ何ヲ以テ力之ヲ窮メン、蓋造化ノ妙機自一定ノ法則アルヲ以テ深ク之ヲ考究セハ則得ヘシ、而シテ之ヲ知ルニ二法アリ即經驗ト試験トニレテ經驗ハ物ノ自然ニ變化運動ヲ現ハスノ狀ヲ見テ其理ヲ考フルヲ曰ヒ、試験ハ人カヲ以テ物ニ變化運動ヲ起サシメ其理ヲ究ムルヲ曰フ、例ヘハ熟菓ノ墜ルヲ見テ空中ノ物皆地面ニ落ル實證ヲ得ルカ如キ是經驗ナリ、又空中ノ物必皆地面ニ落ルヤ否ヤ其理ヲ

知ラムト欲レ、試ニ一物ヲ取り之ヲ手中ヨリ放チ以テ其確證ヲ得ルカ如キ是試験ナリ、數々此兩驗ヲ積ミ得ル所ノ證相同レキハ即造化ノ法則タルヲ知ル、是物理ヲ窮ムルノ大要ナリ、夫地誌ヲ學フ者ハ必先地球ノ形狀、海陸、山川、洲國ノ區域ヲ領會レ以テ各國ノ風俗、制度、文物ノ如何ヲ講スルニ至ル、物理ノ學豈亦叙ナカラニヤ、故ニ先萬物ノ性質、及變化、運動ノ大理ヲ會得レ、漸進ミテ終ニ日常ノ細事ト雖凡皆一定ノ法則アルヲ思察シ、宜シク細ニ之ヲ推考スヘシ、

第一課 物體論

凡、天地間ニ散在シ人ノ五識ニ觸ル、者之ヲ物ト曰ヒ、而シテ其視ル可キ者ハ金石ノ如ク、又眼ニ視ルコト能ハスト雖、耳ニ聽ク可キ者ハ聲音ノ如ク、又耳目ニ視聽スルコト能ハスト雖モ、鼻ノ能ク嗅ク可キ者ハ香臭ノ如ク、而シテ又口ノ味ニ於ケルハ食味ノ如ク、皮膚ノ冷温ニ於ケルハ空氣ノ如ク、其他凡百ノ物互ニ其形ヲ異ニスル實ニ千態萬狀ト雖モ、舉ケテ皆物ニ非サルハナレ、因リテ此ニ之ヲ言フニ、凡、萬物ハ皆細微

分子相聚合シ以テ其形ヲ成シ、且、既ニ之ヲ物ト言ヘハ必、亦其體アリ、故ニ一個ノ石一滴ノ水ハ、即、體ナリ吾人ノ棲息スル地球ノ如キモ亦體ナリ而シテ又香臭空氣ノ如キハ其質極メテ么微ナレハ得テ見ル可カラスト雖モ、若、其體ナキ片ハ何ヲ以テカ能ク人ノ五識ニ觸感センヤ、然レトモ今此宇宙間ニ於ケル各物ニ就キ其形狀ノ互ニ相異ナルヲ一々指陳セムカ如キハ、其域ノ廣大ナル得テ推窮不可キニ非ス、因リテ其類ヲ分チ之ヲ三體ト爲シ、一ヲ凝固體ト名ツケ、一

增補分門類聚 卷八

ヲ融液體ト名ツケ、一ヲ浮氣體ト名ツケ、或ハ亦  
液氣ノ二體ヲ合セラ之ヲ流動體ト名ツケ、而シ  
テ凝固體トハ分子ノ引力强キカ故ニ互ニ固ク  
凝聚シ以テ常久不變ノ形狀ヲ保持スルカ故ニ  
一隅ヲ舉ケテ以テ其全體ヲ動カス可ク、或ハ其  
體ヲ破碎スルニ非サレハ其一部ヲ他ニ移スコ  
ト能ハサル者ヲ曰フ、金石土木ノ類是ナリ又融  
液體トハ分子ノ聚力弱キカ故ニ常ニ搖動シ易  
ク、且其一部ヲ分離スル時ハ輒テ分離シテ自己ノ  
重量其聚力ニ克ツトキハ分離セシ者更ニ復相  
オモサ

分レ以テ滴々ノ粒ヲ爲シ或ハ之ヲ他ニ移セハ  
其觸ル、所ノ物ニ隨ヒテ忽ニ其形ヲ變スルコ  
ト、譬ヘハ器ノ方圓ニ從ヒテ其形モ亦方圓ナル  
カ如キ者ヲ云フ、水、油、水銀ノ類是ナリ、又浮氣體  
トハ全ク此二體ニ反シ、分子互ニ反撥シテ浮虚  
ナル者ヲ曰フ、空氣、蒸發氣ノ類是ナリ、  
凡ヘテ萬物ハ之ヲ大別スルニ、皆此三體ノ一ニ  
現ハレサルナク、且其形體ヲ變化スルモ亦此三  
體ノ外ニ出ルト歟、譬ヘハ金銀ノ如ク其質堅  
硬ノ者ト雖モ、若シ熱度ノ強キニ遇ヘハ之カ爲ニ

改正 勿里第 卷二 四

固有ノ引カヲ奪ハレ、其分子相離レテ融液體トナリ、又水ハ固ヨリ融液體ナレトモ若温暖ニ遇ヘハ蒸發シテ浮氣體トナリ、寒冷ニ遇ヘハ氷結シテ凝固體トナルカ如キ其他皆類推ス可シ又物體ニ純雜ノニアリ而シテ、純體トハ一種ノ元素ニ因リ以テ其體ヲ成シ、他種ノ混和セサルモノヲ言フ、黄金ノ如キ是ナリ、又雜體トハ二三種ノ元素相合シ以テ其體ヲ成スモノヲ言フ、空氣ノ如キ是ナリ、蓋世界ノ萬物ハ其數極メテ多ク之ヲ記臆セムハ實ニ難シト雖モ、其畢竟ヲ窮

ムレハ其體質ヲ組成スル元素ノ數ハ僅ニ之ヲ六十四種トシ、其中唯金屬、非金屬ノ別アルニ過キス、今其一ニヲ舉ケテ之ヲ示サムニ、殊別ナル光澤アル者之ヲ金屬ト名ツケ、其數凡、五十有餘即金、銀、銅、鐵等ノ類ヲ言ヒ、其他ヲ非金屬ト名ツク、即酸素、水素、窒素、硫黃等ノ類ヲ言フ、而シテ又凡、萬物ハ天然、人造ノ別ナク大約皆二三ノ元素相合シ以テ其體ヲ成ス、故ニ顧フニ人ハ居常此六十四元素ノ純體ヲ見ルコト實ニ甚稀ナリ、爰ニ是ヲ例セムニ、古昔ハ皆空氣ヲ以テ純體トセ

シカトモ一千七百年代ノ末創メテ其雜體ナル  
ヲ發明シ、以テ二十一分ノ酸素ト七十九分ノ窒  
素ト相合シテ成ル者タルヲ知ルニ至レリ、且水  
ノ如キモ亦八分ノ酸素ト一分ノ水素ト相抱合  
シ以テ其質ヲ成シタル雜體ノ者タリ、蓋此純雜  
兩體ノ性質ヲ查窮シ、若クハ各物ノ質ヲ分析シ、  
或ハ之ヲ抱合セシメ、以テ其親和効用等ヲ講明  
スル者之ヲ化學ト曰フ、故ニ凡、物理ヲ精細ニ知  
ラムト欲セハ必、又化學ヲ兼テ學ハスハアル可  
カラス、

第二課 物性論

上ニ記スルカ如ク、物其體アレハ必、亦其用アリ、  
故ニ萬物ハ皆互ニ其効用ヲ爲ス可キ性徳ヲ有  
セリ、是ヲ物ノ性ト曰ヒ、而シテ物理ヲ講スル者  
ハ須ラク先、其性ヲ知り、而ル後ニ其用ヲ察スヘ  
シ、因リテ今其物性ヲ大別シ以テ二種ト爲シ、一  
ヲ通有性ト曰ヒ、一ヲ偏有性ト曰フ、蓋此二性中  
固體、流體ヲ論セス、總ヘテ萬物ノ具有スルモノ  
是ヲ通有性ト曰ヒ、又此物ニ具リテ彼物ニ欠ク  
ルモノ是ヲ偏有性ト曰フ



通有性 又真性通性

今又通有性ヲ區分シテ十一トス即チ

填充性

定形性

礙竅性

無盡性

習慣性

分解性

氣孔性

受壓性

膨脹性

運動性

引力性

是ナリ即チ其順次ヲ逐ヒ以テ左ニ其大略ヲ辨明

セ

填充性 又容性

物必其體アレハ必亦幾許カ空處ヲ填充セサル

ナク而シテ其填充スル所ヲ指シテ之ヲ物ノ領有スル所即チ處ト名ツケ以テ物ノ大小ヲ定ム故ニ山嶽ノ領有スル處ハ極ノテ大ニ砂粒ノ領有スル處ハ甚小ナレ其細小ナル砂粒モ亦必一處ヲ填充セサルコトナケレハ要スルニ砂粒ヨリ更ニ小ナル幾千萬倍ノ至微至細ナル物ト雖トモ既ニ其體質アレハ必其一處ヲ填充セサルナシ是ヲ物ノ填充性ト曰フ而シテ又物既ニ必一處ヲ填充スレハ縱令砂塵ノ微ト雖モ各其容アリ、既ニ其容アレハ必亦長廣厚アラサルコト

增補物理四林 卷上

ナシ之ヲ其尺度ト名ツケ長ハ其最大ナル所ヲ  
言ヒ、廣ハ之ニ次キ、厚ハ又之ニ次ク、然レ此三  
者ハ時ニ從ヒ其名ヲ變シ以テ高低、深淺ト稱ス  
ルコトアリ、之ヲ例センニ山嶽、樓臺、ノ如ク聳然  
トシテ地上ニ起立スル者ハ、其下底ヨリ頂上ニ  
至ル距離ヲ指シテ之ヲ厚ト言ハスシテ高ト稱  
シ、又井池、溪谷ノ如ク窈然トシテ人身ノ下ニ在  
ル者ハ、其上部ヨリ下底ニ至ル距離ヲ指シテ之  
ヲ深ト稱スル類ノ如シ

定形性 又形性

萬物皆一火ヲ填塞スレハ必亦大小アリ、長短ア  
リ、方圓アリ、其狀互ニ同レカラスト雖モ、各皆一  
定ノ形ナキヲ得ス、是ヲ物ノ定形性ト曰フ、而レ  
テ此性或ハ物ノ外形ニ就キテ以テ之ヲ記ス可  
キ者アリ、例ハ凝固體ハ常ニ其形ヲ變セサレ  
氏、流動體ハ其觸接スル物ニ從ヒ以テ其形ヲ變  
ス、故ニ球ノ水ニ於ケルカ如キ、球ハ轉々其居ル  
處ヲ移レトモ團々タル其形ハ依然トシテ敢テ  
之ヲ失ハスシテ永久不變ナリ然レ氏、水ハ之ニ  
反シ、若シ甲器ヨリ乙器ニ移セハ忽チ其形ヲ變レテ

改正 物理四林 卷上

八 文部省

乙器ノ方圓ニ從フカ如キ是ナリ、  
礙竄性 又礙性

今茲ニ一物アリ以テ空處ヲ領有スル時ハ、縱令  
他物来リテ其處ニ侵入セント欲スト雖モ、必ズ之  
ヲ碍拒シテ其處ヲ掠奪スルコト能ハサレシム、  
是ヲ物ノ礙竄性ト曰フ、而シテ物體ハ皆必ズ此性  
アルカ故ニ、二物同一ノ時間ニ同一ノ處ヲ領取  
スルノ理ナレ、蓋金石ノ如キ固體ニ於テ此性ア  
ルハ固ヨリ見ルヲ得易シト雖モ、流體ニモ亦敢  
ハテ此性ナキニ非サレハ、今此ニ簡易ノ試法ニ

因リ之ヲ證ヤシ、例ヘハ盆ニ水ヲ盛リテ上端ニ  
至ラシメ其中ニ彈丸ヲ投入スルカ如キ盆内ノ  
水直ニ溢出ス可ク又水ノ充盈スル窄口罅子ノ  
口ニ枹皮ヲ栓塞セントスルカ如キ罅口ノ水其  
幾分ヲ排除スルニ非サレハ、枹皮敢ヘテ其中ニ  
入ルコト能ハス、故ニ若シ其水ヲ一滴モ溢出セシ  
メス以テ密ニ栓塞セント欲シ之ヲ強壓スルト、  
キハ其罅必ズ破裂スルニ至ル、此水ニ礙竄性アル  
ノ證ナリ、又空氣ノ如ク輕虚ナル者モ亦其性ヲ  
有ス之ヲ試スルノ器アリ、即第一圖ニ於ケル裝

第一圖



テ其曲管ノ一端ハ之ヲ  
 丁ノ杯水中ニ入レ而シ  
 テ漏斗ヨリ水ヲ注入スレハ水滴ノ連々瓶内ニ  
 滴下スルニ從ヒ瓶内ノ空氣ハ漸ニ曲管ニ上リ  
 丁ノ杯水中ニ竄入シ來リ沸々聲ヲ發シ泡沫ヲ

置ノ如ク甲ノ硝子瓶口ニ  
 緊密ニ抱皮ヲ充塞シ以テ  
 其蓋ト爲シ瓶内ノ空氣ヲ  
 漏脱セシメス、然ル後ニ其  
 蓋ヲ貫キテ乙ノ漏斗及丙  
 ノ曲管ヲ瓶中ニ穿入レ以

生シ以テ其水面上ニ散逸スルヲ見ルヘシ、是水  
 ト空氣ト互ニ妨碍シテ同時ニ同處ヲ領有スル  
 コト能ハサルノ徴ナリ、故ニ萬物ハ各皆其性ヲ  
 具有ヒサルナシト雖モ、或ハ亦時トシテ其性ヲ  
 缺クカ如ク見ユル者アリ、即チ釘ノ木材ニ入り、食  
 鹽及砂糖ノ水中ニ混和スルカ如キ是ナリ、然レ  
 凡木材ニ釘ヲ槌シ其釘ノ木中ニ入ルハ、唯少シ  
 ク其木理ヲ排開シ以テ其間隙ニ攪入スル者ナ  
 レハ敢ヘテ木ト共ニ同處ヲ占領スルニ非ス、又  
 蓋中ニ水ヲ盈テ其中ニ食鹽、及砂糖ヲ徐々ニ投

増補物理學 卷二

入スルトモ杯水ノ敢テ漲溢セサルハ蓋水ノ分子ヲ互ニ球狀ノ者トスレハ其各分子ノ相接スルニ必ス空隙ナキコト能ハス而シテ食鹽ノ分子ハ水ノ分子ヨリ更ニ微細ナレハ漸ニ其空隙中ニ滲入シ而シテ又砂糖ノ分子ハ極メテ小ナレハ尚其餘地ヲ遺セル微隙中ニ竄入スルニ因レリ然レニ此ノ如キハ明ニ其委曲ヲ見ル可キニ非サレハ第二圖ヲ設ケテ假ニ水分子ノ狀ヲ粗大ニ寫シ以テ其間隙ニ食鹽ト砂糖ノ滲入セシ模様ヲ示セル者ナリ若又再他ノ粗大ナル物ヲ

借リテ以テ之ヲ例セバ

一箇ノ桶内ニ橙<sup>ダイク</sup>子ヲ盛

リ次ニ多量ノ豌豆ト砂

粒ヲ漸ニ投入シ少シク

桶ヲ振搖スレハ豆砂ノ

ニ物皆各橙子ノ間隙ニ

攪入スルト其理ヲ同クス又一升ノ砂粒ヲ小桶

ニ盛リ更ニ一升ノ水ヲ之ニ注入スルニ其水全

ク砂粒ノ間隙ニ滲入シ其容量ノ二升ヲ得ルニ

至ラサルモ其理亦相同シ

第二圖



改正 勿里答第 卷二 十一

增補抄玉門水 精山

無盡性

宇宙間、萬物ハ皆消滅スルノ理ナシト雖モ、人常ニ其觸目スル火水ノ爲ニ焚消シタル諸物ヲ指シテ、眼力ノ見ルヲ得サルニ至ル時ハ之ヲ全ク盡クト謂フ、然レモ其實ヲ論スル時ハ其色、性、形、ノ如キハ火水ノ爲ニ變スルニ至ルト雖モ、必ス猶存在スルモノナキコトヲ得ス、例ヘハ今一盤ノ水ヲ火上ニ置キ、若クハ日光ニ曝カ如キ、直ニ蒸發氣トナリ氣中ニ浮遊シテ雲トナリ、其形ヲ變スト雖モ上際ノ冷氣ニ遇ヘハ復凝結シテ、或

ハ雨トナリ或ハ雪霰トナリ再地上ニ降リテ泉河ノ源ヲ爲ス、又一箇ノ木片ヲ取リ之ヲ焚燒スルカ如キ忽其形ヲ失フト雖モ一分ハ烟炎トナリテ飛散シ、一分ハ灰及鹽トナリテ留存ス、又蠟燭ヲ點スルカ如キ其蠟及燭心ハ共ニ漸々減少シテ見ルヲ得サルニ至ルトキハ、人亦之ヲ指シテ以テ全ク盡滅セリト謂ヘトモ、其蠟燭中ニ含まル所ノ炭分ハ敢ヘテ燃エシニ非ス煙トナリテ空中ニ外リ而シテ其他燃ユヘキ部分ハ變シテ炭酸トナレルナリ、又燈油ノ漸次ニ滅シ以テ

改正の目録

消盡スルカ如キモ是亦燈火ノ爲ニ其油ノ煎蒸  
セラレテ終ニ見ル可カラサル浮氣體トナルニ  
過キサレハ其質全ク消滅スルニハ非サルナリ  
故ニ一物既ニ其形體ヲ變スルコトアレハ嘗テ  
其物體ヲ組成シタル物質ヲ以テ更ニ復色性形  
ノ前者ト異ナル新物體ヲ成ス之ヲ無盡性ト曰  
フ而レテ凡宇宙間ニ在ル各物體ノ斯ク日ニ變  
化シテ新陳代謝シ循環極リナキ是造化ノ妙ナ  
リ

習慣性 又惰性

凡、静止スル物體ハ自、動クコト能ハス又運動ス  
ル物體ハ自止マルコト能ハス是其静止スル物  
體ハ常ニ外力ニ抵抗シ以テ動カサランヲ欲シ  
又運動スル物體ハ直線ニ進行シ以テ其動ノ復  
息マサランヲ欲スルニ因レリ、之ヲ物ノ習慣性  
ト曰フ故ニ各物體ノ動靜ハ必、他ノ力ニ藉レル  
ニテ自己ノ力ニ由レルニ非ス、而シテ今無生物  
體ノ自運動スル能ハサルハ、人ノ日常親觀スル  
所タレハ多言ヲ費マサシテ瞭然タレ、此ニ  
其一ヲ舉ケンニ例ハハ十年前某地ニ於テ一見

セシ巖石ノ如キハ今日ニ及ヒテモ依然トシテ  
 毫モ其地位ヲ變セズ若外力ノ來リ之ヲ移動ス  
 ルニ非サレハ猶永久其處ニ鎮在ス可ク而シテ  
 又各物ノ一次運動ヲ起ス時ハ必亦自其動ヲ息  
 ムルコト能ハサルハ之ヲ靜定スル物體ニ比ス  
 レハ容易ニ見ルコト能ハスト雖モ其理ニ於テ  
 ハ敢ヘテ異ナルコトナシ例ヘハ地球及諸天象  
 ノ如キハ皆自其軸ヲ回轉シ又ハ其軌道ヲ循環  
 スル實ニ天地創造ノ始ニ同シ又須臾ニ靜止セ  
 サル是自其動ヲ息スルキカヲ有セサルニ因リ

リ又之ト異ニシテ地上ニ運動スル諸體ノ如キ  
 ハ一回之カ運動ヲ起サレメタル外力ノ衰減ス  
 ルニ從ヒ漸ニ其動ヲ息ニ至ル是全ク空氣ノ抗  
 抵ト地心ノ其物體ヲ引クトノ二カニ因リテ自  
 己ノカラヲ以テ靜止スルニ非ス若能ク此二カヲ  
 除クヲ得ハ其物必習慣性ノ爲ニ直行シテ長ク  
 止マサルヘシ故ニ例ヘハ海上ニアル舟ノ如キ  
 帆ヲ揚ケテ風力ヲ藉リ一次進走ノ勢ヲ逞クス  
 ルトキハ縱令風止マ帆ヲ下スト雖モ復挽漕ノ  
 勞ヲ須ヒスレテ數時間前進スヘク若水ノ抗力



其勢ヲ挫クニ非サレハ方ニ進マテ止マサルヘ  
シ、又車行ノ極メテ急ナルニ人アリテ其車上ニ  
立チ卒然車ノ止ルニ逢ヘハ其人必前ニ倒レサ  
ルヲ得ス、是其人身ノ上半ハ猶進行ノ動力ヲ固  
持シ而シテ其足ノ先止リテ此動力ヲ失フカ爲  
ナリ、又之ニ反シテ静定スル物體ヲ急ニ動サム  
トスルニ常ニ必ス抗カアルモノハ、是其物ノ嘗テ  
維持スル静止ノ力之ヲ動サントスルノ勢ニ逆  
フニ因レリ、故ニ例ヘハ急ニ輜車ヲ輓キ出サン  
トスルカ如キ其初微ニ抗カアリテ之ヲ動スニ

差難キヲ覺ユルモノ、是其習慣性ノ嘗テ有スル  
静止ノ力ヲ保持スルニ因レリ

分解性 又分性

既ニ上文ニ記載セシ如ク、凡、萬物ハ皆細微ノ分  
子相聚合シ以テ其形ヲ成スモノタレハ、撃チテ  
之ヲ破碎シ截リテ之ヲ細分スヘカラサル者ナ  
シ、是ヲ物ノ分解性ト曰フ爰ニ例ヲ舉ニニ一團  
石ノ如キ之ヲ破碎シテ細粉トナシ更ニ又微塵  
ト爲ス片ハ啻ニ眼力ノ覩ル能ハサルノミナラ  
ス、顯微鏡ノ力ヲ藉ルトモ敢ヘテ見ユ可カラサ

ルニ至リ得テ其窮極スル所ヲ知ラス然レモ理  
 學者ノ言ニ據レハ更ニ其一微塵ヲ打碎シテ止  
 マサルトキハ終ニハアトーム極微分子ノ義ト謂ヘル  
 ニ至ル<sup>レ</sup>シト因リテ思フニ若能ク人目ヲシテ  
 極メテ銳敏ナラシメ兼テ又至精至巧ノ器ヲ得  
 ルアラハ、其一細粉末ヲ更ニ千破萬碎シ以テ復  
 分ツ可カラサル細微分子ノ極ヲ見ルニ至ル可  
 也、是所謂理學者ノアトームニシテ顧フニ物質  
 原始ノ成分タルヘシ、蓋此アトームハ希臘語ニ  
 シテ復分ツ可カラサルノ義ヲ云ヒ、而シテ此推

理ノ論ニ從ヘハ天下ノ萬物皆數種ノアトーム  
 ヨリ其體ヲ成シ、而シテ又其一物體ヲ成スアト  
 ームノ性形ハ常ニ必相同シキモノタルヘシト  
 雖モ、人智未<sup>レ</sup>其至極ヲ知ルニ至ラサルナリ  
 又此分子ノ微細ナルヲ例スルニ綠畫料少許ヲ  
 取り之ヲ一桶水ニ溶解スルカ如キ滿桶ノ水皆  
 綠色ニ變シ、又一滴ノ血ヲ盆水ニ點スルカ如キ  
 全水忽紅色ニ化ス、是皆其分子ノ水分子中ニ滿  
 散スルニ因レリ、然レモ流體ノ分子ハ顯微鏡ヲ  
 用井之ヲ驗スルニ大率皆見ルコト能ハス、而シ

天差其粗大ニシテ僅ニ見ルヲ得ヘキモノハ油、  
 血、乳等ノ數者ニ過キサレトモ此等ノ分子ハ各  
 皆球狀ナルニ因リ、之ヲ考フレハ以テ水分子、及  
 流體分子ノ圓形ナルヲ徵スルニ足レリ、而シテ  
 又更ニ此ヨリ甚レキハ麝香一匁我一厘餘ヲ取リ  
 之ヲ一室内ニ貯フルニ香氣滿室ニ揮散レ以テ  
 常ニ人鼻ヲ撲ツ、是其分子ノ空氣中ニ散布レ以  
 テ室内ニ瀰漫スルニ因レリ、故ニ屢室内ヲ新鮮  
 ナラシムト雖モ其香ノ忽ニ散布スルハ依然ト  
 レテ舊ノ如シ、而シテ往時二十年ヲ經ルノ後至

精ナル秤盤ヲ用井テ之ヲ稱かリレニ其減量ヲ徵  
 スル能ハサリシト言フ、其分子ノ么秒纖微ナル  
 實ニ驚クニ堪ヘタリ、又敗糊、死水ヲ針尖ニ點レ  
 精巧ノ顯微鏡ヲ用井テ之ヲ伺フ時ハ、無數ノ小  
 動物其中ニ栖息游動スルヲ見ルヘク、又此小動  
 物等ノ相集リ以テ化成セシトリポリト稱スル  
 一種ノ石アリ而シテ其石ハ僅ニ一立方インチ  
 我零立寸ヲ分割レ其四十分一ニ於テ其蟲凡十  
 五八六餘ヲサレハ、其數タル全地球ノ人類ヨリ多  
 億ニ下レテ又此等ノ微蟲ト雖モ各皆其肢體ヲ具

へ生活スルヲ見レハ要スルニ必其脈絡臟腑アリ水液アリテ循環ス可久是ニ由リテ之ヲ考フレハ其體軀機器ヲ組成スル分子ト其水液分子トノ至微至細ナル得テ意思ノ及フ所ニアラサルナリ

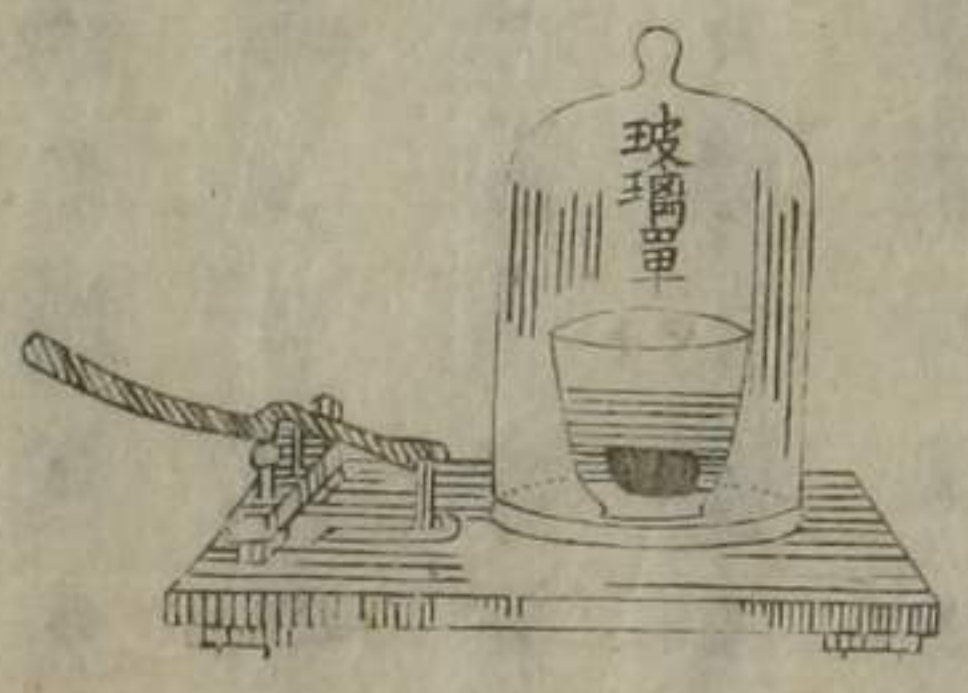
氣孔性 又氣孔

諸物體ヲ組織スルアトームノ形狀ハ未之ヲ詳ニスル能ハスト雖モ要スルニ一ノ原由アリ以テ各分子ノ相接スル敢テ密着スルニ非サレハ必空隙アラサルナク而シテ此空隙ヲ氣孔ト名

ツク故ニ之ヲ物ノ氣孔性ト曰フ蓋海綿浮石ノ如キハ其氣孔ノ大ナルコト肉眼ヲ以テ見得ル所ナレトモ黄金白金等ノ如キハ其質極メテ精微緻密ナレハ縱令顯微鏡ノ力ニ藉ルト雖モ之ヲ見ルコト能ハス然レトモ亦敢ヘテ氣孔ナキニハ非サルナリ  
曩ニ以太利ノ弗羅連斯府ニ於テ水ノ能壓搾シ得可キヤ否ヤ之ヲ試驗セシコトアリ而シテ當時水ノ縮小甚著ルキヲ見ス却テ黄金ニ氣孔アル實證ヲ得タリシカ蓋其試法ハ黄金ヲ以テ中

空ノ圓球ヲ造リ其内ニ水ヲ充テ之ヲ固封シテ、  
徐ニ壓扁スルニ在リ、而シテ斯ク其試法ヲ行フ  
ニ、嘗テ其器内ニ充テシ水ノ恰モ汗ノ入肌ヲ濕  
スカ如ク、黄金ヲ透シテ器外ノ全面ニ漏出スル  
ヲ見タリ因リテ水ハ直徑一インチノ二百萬分  
一ニ及ハサル微小ノ氣孔ヲ透ス可キ者タルヲ  
知ルニ至リ又水ノ氣孔ヲ有スルハ既ニ上文ニ  
説明セシカ如ク、且之ヲ温湯トナスキハ食鹽及  
砂糖ヲ投入スルニ之ヲ冷水ニ比スレハ其量更  
ニ多キヲ加フ可シ、是熱ハ水ヲ膨脹セシムルニ

第三圖



因リ、而シテ更ニ之ヲ詳言スレハ、熱ハ水ノ分子  
ヲ大ナラシメ以テ其間隙ヲ疎隔セシムルニ因  
ル、而シテ又花崗石ノ氣孔ヲ驗スルニハ其一小  
塊ヲ滿水ノ器中ニ入レ第三圖ノ排氣筒ノ玻璃  
罩内ニ置キ然ル後ニ罩内ノ空氣ヲ排除スルト  
キハ必、其水面ニ小泡ノ浮  
散スルヲ見ル可ク、是其石  
ノ氣孔極メテ細微ナレハ  
常ニ之ヲ見ル能ハスト雖  
モ、排氣鐘内ニ於テハ水上

ノ氣壓全ク減少スルカ爲ニ石ノ孔中ニ竄入セ  
 ル空氣去リテ水中ヲ衝キ以テ其散逸スルニ因  
 リ、譬へハ猶一片ノ燒石ヲ取り之ヲ水中ニ沉ム  
 ルニ沸々聲ヲ發シ水面ニ泡沫ヲ生スルカ如シ、  
 又鐵ヲ錘撃シ以テ其容積ヲ減スルカ如キモ、是  
 其分子ヲ密接セシムルニ因レハ、亦之カ氣孔ア  
 ルヲ微ス可ク而シテ若シ其分子間ニ一點ノ微隙  
 モ之ヲ存セサレハ、縱令百方カヲ極ムト雖モ、豈  
 ニ能ク其分子ヲ密着セシム以テ其容積ヲ減ス  
 ルヲ得ンヤ

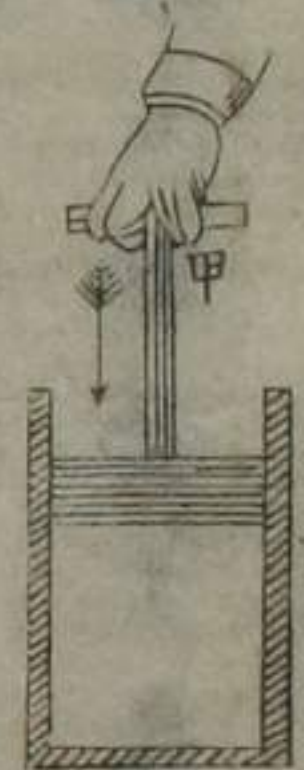
受壓性及膨脹性

凡カヲ以テ物體ヲ壓擦スル時其容積ノ縮小ス  
 ルモノ是ヲ受壓性ト曰ヒ、其壓力ノ去ル時再擴  
 張シテ原積ニ復スルモノ是ヲ膨脹性ト曰フ、而  
 シテ此兩性ハ彼此相反スルカ如シト雖モ亦皆  
 氣孔アルニ因リ、且既ニ前文ニ論セシ如ク、物體  
 ノ分子ハ縱令微細ナリト雖モ、固互ニ密接スル  
 ニ非ス、故ニ若シ外力來リテ強ク之ヲ壓迫スルア  
 レハ之カ爲ニ其氣孔必感縮セラレ以テ各分子  
 ヲ密接セシム然レハ其容積モ亦從テ縮小ス、故

= 海綿ノ如キハ手ヲ以テ僅ニ之ヲ壓ストモ直  
 = 縮小ニテ原積ノ十分一ニ至リ、又之ニ同シク  
 若<sub>レ</sub>他力<sub>ス</sub>熱<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>キ<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>各物體ノ氣孔ヲ大ナラ  
 シムルトキハ、其力ノ強弱ニ從ヒ以テ其容積ヲ  
 増大ナラシムヘシ、而シテ凡<sub>レ</sub>萬物皆此兩性ヲ具  
 有スレハ、若<sub>シ</sub>工夫ヲ用井テ之ヲ縮張スルニ敢ヘ  
 テ其意ノ如クナラサル者ナカル可シ、故ニ今一  
 ノ鐵杆<sub>ヲ</sub>アリ之ヲ一孔ニ挿入スルニ較、太ク入り  
 難キカ<sub>ヲ</sub>如キモ之ヲ鑿擊シ以テ壓搾スルトキハ、  
 其容縮小ニ自由ニ通過スルヲ得ヘク、而シテ復<sub>テ</sub>

之ヲ灼熱スルトキハ其積膨脹シ、再<sub>テ</sub>其孔ニ入ル  
 コト能ハサルニ至ル可シ、又融液體ハ往時ヨリ  
 人皆壓搾ス可カラサルモ今ト爲シ、既ニ久シキ  
 ヲ經タリシカ、近世ニ及ヒ至巧ノ器ヲ用井以テ  
 其壓搾ス可キヲ驗出セリ、又融液體ニ膨脹性ア  
 ルハ寒暑鐵中水銀ノ温ニ遇ヒテ昇リ、又ハ水ノ  
 滾沸スルトキ其容ノ増加スルヲ見レハ以テ之  
 ヲ知ルニ足ル可シ、且<sub>ツ</sub>浮氣體ノ此兩性ヲ具有ス  
 ルハ試器ニ由リテ之ヲ驗スルヲ得可シ、即第四  
 圖ノ如ク、**甲**ノ活塞ヲ**乙**ノ圓筒中ニ入ル、ニ其

第四圖



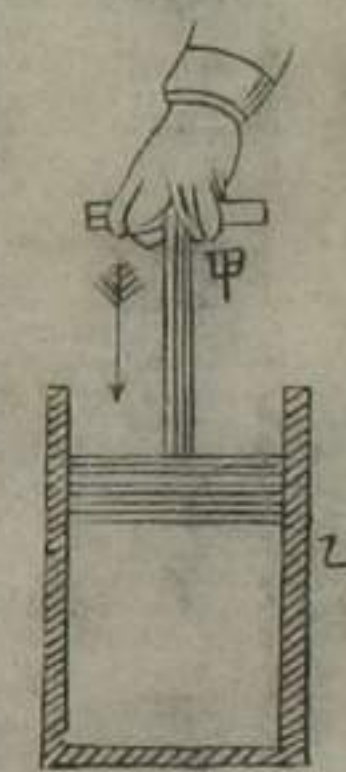
觸接スル處ヲ最モ周密ニ適合シ以テ空氣ノ脫漏ヲ防キ而ル後ニ其活塞

ヲ推進スルトキハ充分ニ空氣ヲ壓搾シ又之ヲ抽退スルトキハ其空氣再膨脹ス故ニ浮氣體ハ之ヲ他ノ兩體ニ比スレハ極メテ壓搾スルヲ得可久因リテ其膨脹彈射モ亦極メテ甚シ蓋風銃ノ丸ヲ彈キ又ハ栗子ヲ熱灰ニ埋ムルニ爆々聲ヲ發シ其皮ノ破裂シテ迸飛スルカ如キ其理相同シ

之ヲ灼熱スルトキハ其積膨脹シ再其孔ニ入ルコト能ハサルニ至ル可シ又融液體ハ往時ヨリ人皆壓搾ス可カラサルモ入ト爲シ既ニ久シキヲ經タリシカ近世ニ及ヒ至巧ノ器ヲ用キ以テ其壓搾ス可キヲ驗出セリ又融液體ニ膨脹性アルハ寒暑鏡中水銀ノ温ニ遇ヒテ昇リ又ハ水ノ滾沸スルトキ其容ノ増加スルヲ見レハ以テ之ヲ知ルニ足ル可シ且浮氣體ノ此兩性ヲ具有スルハ試器ニ由リテ之ヲ驗スルヲ得可シ即第四圖ノ如ク甲ノ活塞ヲ乙ノ圓筒中ニ入ルニ其



第四圖



觸接スル處ヲ最モ周密ニ  
適合シ以テ空氣ノ脫漏  
ヲ防キ而ル後ニ其活塞

ヲ推進スルトキハ充分ニ空氣ヲ壓搾シ又之ヲ  
抽退スルトキハ其空氣再膨脹ス故ニ浮氣體ハ  
之ヲ他ノ兩體ニ比スレハ極メテ壓搾スルヲ得  
可久因リテ其膨脹彈射モ亦極メテ甚ダシ蓋風銃  
ノ丸ヲ彈キ又ハ栗子ヲ熱灰ニ埋ムルニ爆々聲  
ヲ發シ其皮ノ破裂シテ迸飛スルカ如キ其理相  
同シ

運動性 又動性

物體皆其習慣性ヲ固持スルカ故ニ自運動ヲ起  
スコト能ハスト雖モ若其物ニ應スル力ヲ用井  
ルトキハ敢ヘテ動カスコト能ハサルモノナキ  
ハ是物ニ運動性アルニ因レリ故ニ例ヘハ蒸氣  
ノ船車ヲ飛走セシメ火藥ノ銃丸ヲ彈射シ暴風  
ノ波濤ヲ起スカ如キ皆以テ此性ヲ徵スルニ足  
レリ而レテ凡諸體ハ皆此性ヲ有シ常ニ其靜ナ  
ル所以ノモノト相抗シ動能ク靜ニ勝ソトキハ  
則チ動ク世上若此力ナクハ兩間ノ萬物皆死塊ト

ナリテ運動變化スルコト能ハサルヘシ、然ルニ  
已ニ此性アルカ爲ニ能ク運動變化スルヲ得ル  
ナリ

引力性 又重カ

萬物各他ノ物體ト互ニ相牽引スルカヲ有セサ  
ルモノナシ、是ヲ物ノ引力性ト曰フ、蓋此力ハ常  
ニ地上ニ在ル物ノ有スルノミニ非ラス、遠ク日  
月ニ達シ、總ヘテ諸體ヲ互ニ相近接セシメント  
スルカナリ、故ニ地ニ在テハ之ヲ引力ト云ヒ、而  
シテ又物皆地面ニ向ヒ墜下スルカ故ニ地上ノ

物ニ在リテハ之ヲ重カト云フ、是地ノ物ヲ引キ  
物又地ヲ引キ以テ其物量ヲ重カラシムルニ因  
レリ、即球若クハ石ヲ取り之ヲ手中ヨリ落スニ  
其球、石、必直下シテ地面ニ至ルカ如キ此引力性  
ニ外ナラス、

第三課 偏有性 又假性

既ニ上文ニ記載セシ如ク、偏有性ハ獨其物ニノ  
ミ止リ得ル所ノモノナレハ萬物皆必具有スル  
ノ性ニ非ス、是通有性ト自其異ナル所ナリ、今又  
之ヲ區分シテ八種ト爲ス即チ

凝聚性  
コリカタマル

柔軟性  
ヌカカニシヤリウキ

受展性  
オシノヘニウキカスルキ

粘着性  
チバリツク

彈力性  
ハジクチカラ

應抽性  
ヒキカスルキ

堅硬性  
カタキ

碎脆性  
モロキ

是ナリ

凝聚性 又凝聚力

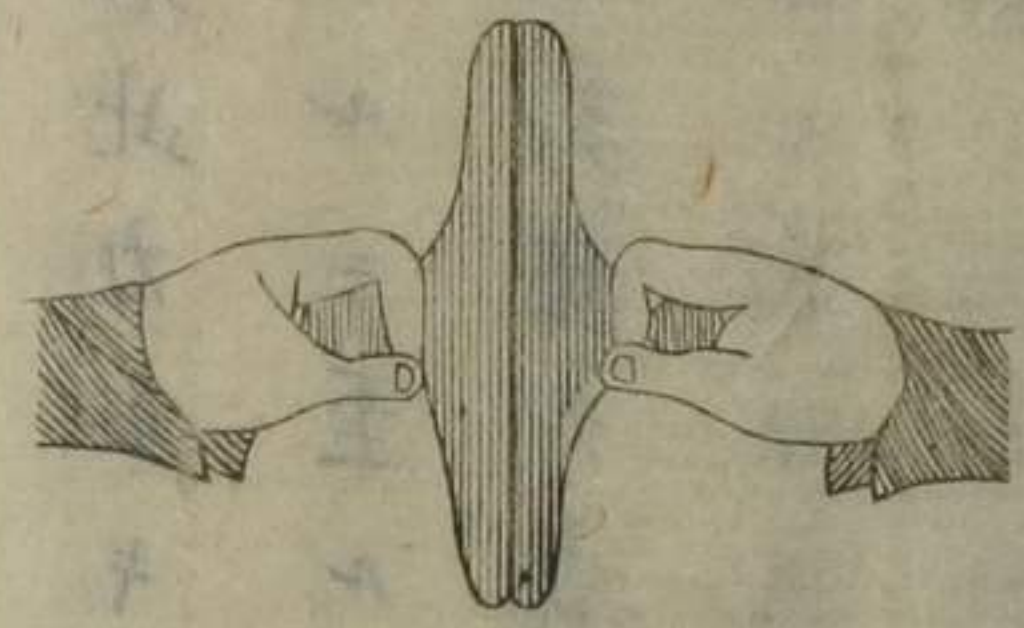
各物體ノ分子互ニ相接スルニ其同質ヲ固係スル一種ノ引カヲ具有スル者アリ、是ヲ凝聚性ト曰フ、蓋各物皆此力ノ強弱ニ因リテ互ニ剛柔硬軟ノ別ヲ爲スト雖モ、其力多クハ凝固體ニ屬シ其分子ヲ凝結シテ全體ヲ集成スルノ原ヲ爲ス

故ニ若此カナキトキハ諸質皆疎解シ固體全ク齏粉タルニ至ル可レト雖モ、唯此力アルニ因リテ能ク其體ヲ成ス、而レテ融液體モ亦此性ヲ有スト雖モ其力甚薄弱ナレハ自己ノ重量却テ此力ニ勝テ其分子ヲレテ搖動流離セシム、又浮氣體ハ此兩體ニ反レ全ク此性ヲ缺キテ却テ相反撥スルノカヲ有レテ其分子ヲ擴張セシム

粘着性 又粘着力

今茲ニ二個ノ物體アリ、而レテ其表面ヲ密接スルトキハ互ニ相引キテ附着スルカアリ、是ヲ粘

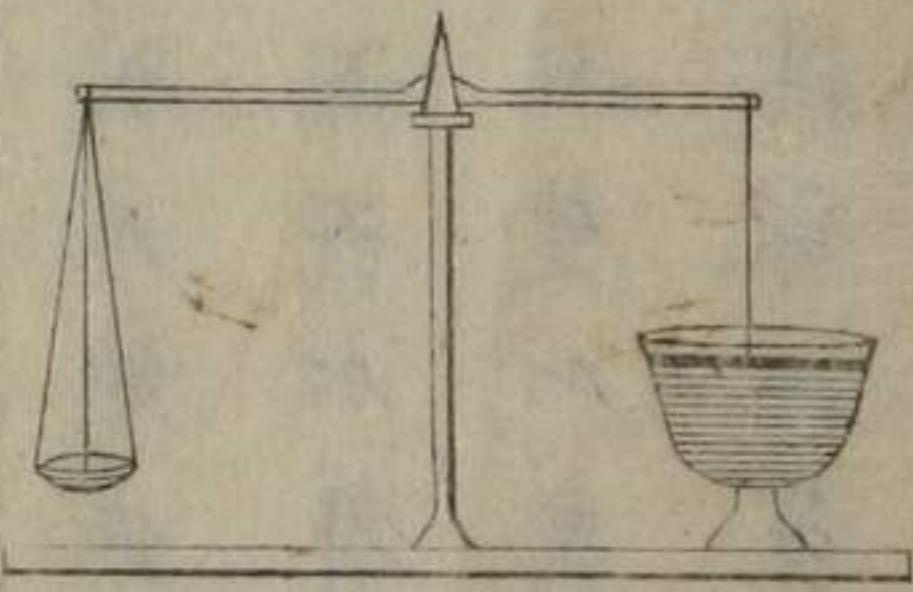
着性ト曰フ、蓋此性ハ物ノ同質異質ヲ論セス互ニ其表面ヲ貼合セシムルカニシテ、之ヲ試驗スルニ粘著板ト稱スル器アリ即第五圖ノ如ク玻璃若クハ銅ヲ以テ二版ヲ製シ其面ノ相接スル所ヲ充分ニ平磨シ以テ緊シク貼合スレハ、百方



第五圖

力ヲ極ムルニ非サレハ離開スルコト能ハス、且其接スル所ノ面愈大ナレハ之ヲ分ツモ愈難シ、又異質ノ兩物互ニ相附着スルハ之ヲ例ヘハ、第

第六圖



六圖ノ如ク天秤ノ一端ニ銅板一片ヲ懸ケ他端ノ秤盤ニ法馬ヲ載セテ之ヲ平均セシメ、而シテ其銅板ノ下面ハ下床ノ面ト相平行シ些ノ傾斜ナキヲ要ス、蓋シ斯ノ如クシテ毫モ此銅板ニ觸ル、コトナク、盆ヲ其下ニ置キ之ニ水ヲ注入シ以テ銅版ノ下面ニ達セシメ其相觸ル、ニ至テ止ム、然ル後其水面ニ觸ル、銅版ノ大小ニ從ヒ更ニ多少ノ法馬ヲ取り之ヲ他端ノ秤盤ニ加フルニ天秤ノ兩端敢

テ其平均ヲ失フコトナシ、是、固體流體ノ兩間ニ於テモ亦互ニ粘着カアルヲ證スルニ足リ、且、封蠟ヲ紙片ニ貼シテ相離レス、又ハ手若クハ竹木片ヲ水中ニ浸スニ水分子ノ附着シテ濕潤スルカ如キ亦以テ此性アルヲ徵ス可シ

堅硬性及柔軟性

金、銀、鐵、石、ノ如ク凝聚力強クシテ其分子間ニ侵入メントスル外物ニ抗シ、軋ク之ヲ斷ツコト能ハサラシムルモノ是ヲ物ノ堅硬性ト曰フ、寶石ノ類此性殊ニ多シ、又諸金ヲ混和シテ堅牢ノ質

ヲ増スモノアリ、金ニ銀ヲ混スレハ愈、堅ク銅ヲ和スレハ更ニ其堅キヲ増スノ類ノ如シ、而シテ此性ノ強弱ハ其分子ノ互ニ凝聚シタルカニ屬スルモノナリ、又密體ハ其集合スル分子ノ多寡ニ屬スルカ故ニ全ク此堅硬ト相判スル所アリ、即鉛ハ密ナリト雖モ其質堅カラス、又鯨鬚ハ屈曲セシム可レト雖モ容易ニ破壊シ難キ類ノ如ク、而シテ分子ノ密ニ錯綜スルモノ是ヲ柔軟性ト曰フ、蓋此兩性ハ共ニ凝聚力ノ致ス所ト雖モ、相混セサルヲ要スヘシ、例ヘハ錨索ノ能ク重キ

ニ堪ヘテ柔軟性强シト雖鐵石ノ如ク堅キニ非  
ラサルヲ見テ了解スヘシ

碎脆性

凡、物體ニ打チテ摧折レ易ク撞キテ破碎シ易キ  
モノアリ、是ヲ碎脆性ト曰フ、蓋此性ハ全ク柔軟  
性ト相反スレトモ堅硬ニシテ分子ノ凝聚疎鬆  
ナル物多クハ此性ヲ存ス故ニ例ハハ玻璃ノ如  
キハ其堅硬ナル能ク鋼鐵面ヲ抓劃レ以テ傷痕  
ヲ留ムレトモ其脆キト特ニ著ルキモノナリ、  
又縱令柔軟性ヲ有スル物ト雖モ、其原質ヲ變レ

テ碎脆性ト爲スコトヲ得ヘレ例ハハ鐵條ノ如  
キ之ヲ煨キテ紅トナシ卒然冷水ニ投シテ急ニ  
冷ストキハ變レテ脆性トナル然レモ之ヲ放置  
シテ漸ニ冷ストキハ其原性ヲ保持シテ柔軟ナ  
ル性ヲ失ハス、故ニ之ヲ屈撓レ或ハ延張ストモ  
敢ヘテ破碎スルニ至ラサルナリ

弾力性

今爰ニ蹴鞠ヲ取り數尺ヲ隔テ壁ニ向ヒテ之ヲ  
擲ツトキハ直ニ彈却シ、又反跳護謨ノ兩端ヲ執  
リ引テ之ヲ放ツトキハ翻飛シテ故形ニ復シ、又

象牙ノ二球ヲ取り互ニ強く衝突スレハ相觸ルル所凹ク窪ミ相離ルレハ忽亦其故ニ復レテ痕跡ヲ見ス、是ヲ物ノ弾力性ト曰フ、而シテ時儀ノ自動スルモ亦此理ニ等ク卷鐵ノ弾力アルニ因レリ、然レトモ此力ハ自其度アリ永ク張り久レク壓レテ其度ヲ過クストキハ其力全ク衰ヘテ其故ニ復スルヲ得サルモノアリ、例ヘハ弓ノ如ク、又灰粘土ノ如キハ弾力ナキカ故ニ一次之ヲ壓スレハ<sup>クボミ</sup>陷凹シテ永ク其痕ヲ存ス然ルニ浮氣體ハ之ニ反レテ其弾力甚強ク常ニ虚處ニ擴充

スル等ハ蒸氣機關ヲ見テ之カ猛勢ヲ察ス可シ

受展性

金、銀、銅、鐵ノ如ク鋤展シテ薄葉ト爲ス可キモノ之ヲ物ノ受展性ト曰フ、例ヘハ<sup>カヂヤ</sup>鍛工ノ諸金ヲ鋤シテ日用ノ諸器ヲ制シ、<sup>ヤキモノ</sup>陶匠ノ土ヲ埏シテ<sup>ヤキモノ</sup>陶器ヲ造ル等皆此性ニ原ク、而シテ此性多分ハ金類ニ屬シ殊ニ黄金ノ如キハ之ヲ他ノ金屬ニ比スレハ最モ鋤展シ易シ、故ニ<sup>ハッヤ</sup>箔工ハ金ヲ打展シ以テ極薄ノ金箔ヲ製ス、而シテ、銀、錫、鐵、銅ノ如キハ之ニ次クモノトス、然レトモ亦展ヒ難キ金屬ア

增補抄玉所不

リアンチモニト、ビス、チ、ノ如キ是ナリ

應抽性 又伸性

凡、物ニ細ク抽キ長ク延ハシテ線トナスヘキモ  
ノアリ、是ヲ應抽性ト曰ス、而シテ受展性ヲ有ス  
ル金屬ハ概皆抽テ細線ト爲スヲ得可シト雖モ、  
此等ハ皆其度ヲ異ニス、例ヘハ諸金中黄金ノ如  
キハ最モ鋤展シ易ク、且、最モ抽延シ易シ、而シテ  
錫ノ如キハ鋤延シテ輒ク薄葉ト爲スヲ得ヘケ  
レトモ織抽シテ細線ト爲スコト能ハス、蓋、黄金  
ハ僅ニ其一<sup>オス</sup>分<sup>ニ</sup>餘<sup>ヲ</sup>織抽シ、漸<sup>ニ</sup>之ヲ延長シ

テ鋼鐵器ノ細孔ヲ貫通セシメテ至細ナル線  
ト爲レ、其長大凡三十里ニ至リシコトアリト云  
ス、而シテ又更ニ其線ヲ歴遍スルトキハ之ヲ銀  
身ニ被ラシムル<sup>キ</sup>衣ト爲スヲ得ヘシ、コレヲ見  
テ誰カ敢ヘテ其微細ナルニ驚カサランヤ、之ニ  
次キテ白金幾ト黄金ニ等シク延長スルヲ得ヘ  
シ、又玻璃ノ脆キカ如クナルモ火温ニ因リテ之  
ヲ柔軟ナラシムレハ彈カアル細線トナスヲ得  
ヘク、且、若<sup>ク</sup>之ヲ延長シ極メテ細ク抽延スルトキ  
ハ其細キコト殆ト繭絲ノ如キニ至ル可シ

改正勿里番第一卷二

五九

文部省



第四課 動静及速力

今茲ニ物ノ二變ニ關スル造化ノ一定則アリ、即  
 動静ノ謂ニシテ動トハ物體ノ嘗テ在リシ處ヲ  
 易ヘ他處ニ移ルヲ曰ヒ、静トハ之ニ反シテ一處  
 ニ鎮在スルヲ曰フ、然レトモ上文已ニ論セシ如  
 ク、物皆習慣性アルニ因リ外物來リテ其體ニ觸  
 レ之ヲ動ス時ハ變シ動キテ直線ニ進行シ以テ  
 止ムコトナク又他物ノ來リ觸レテ之ヲ撓マス  
 者ナキ時ハ其體静止シ永世敢ヘテ動クコト無  
 シ、故ニ其之ヲ動カス作用ヲ總ヘテカト曰ヒ、此

力ニ相反シテ動クヲ拒ミ永ク動カサルヲ欲ス  
 ルノ作用ヲ抵抗ト曰フ、例ヘハ今弓ニ箭ヲ注<sub>カ</sub>ヘ  
 テ十分ニ彎キ放テハ其箭遙ニ空中ニ飛去ス、此  
 弓ノ彈力ハ即チ力ニシテ、若、其飛箭ノ方向ヲ變セ  
 シムル疾風アレハ其風モ亦力ナリ、之ニ反シテ  
 放箭ノ静止ヲ保持セント欲スル習慣性ハ即チ抵  
 抗ナリ、故ニ物ノ動静ハ必、此二力ノ起ス所ニ非  
 サルハナシ、又動ヲ知ルニ三箇ノ目アリ曰ク速  
 力、曰ク時間曰ク距離是ナリ、速力、緩急アリ、時間  
 ニ長短アリ、距離ニ遠近アリ以テ動ノ強弱ヲ定

ムルヲ得ヘシ、即ち距離トハ物體ノ處ヲ變シテ此處ヨリ彼處ニ至ルノ間ヲ曰ヒ、時間トハ其進行中經過スル所ノ時刻ヲ曰ヒ、速カトハ其進行ノ速速ヲ曰フ蓋、動體過ル所ノ距離愈遠クシテ時間愈短キハ其速カ愈大ナルナリ、故ニ此三目ヲ以テ動ノ定則ヲ知ル可シ即左ニ説明セシ、

第一則

時間ヲ以テ動體ノ經過スル距離ヲ除シ其速カヲ定ム例へハ銃丸アリ四秒時間ニ一千間ヲ行クトスルトキハ四ヲ以テ一千間ヲ除シ以テ二

百五十間ヲ得ル一秒時ノ速カナリ、

第二則

速カヲ以テ距離ヲ除シ其時間ヲ定ム例へハ蒸氣車アリ一時間ニ三十里ノ速カヲ以テ一百二十里ヲ行クトスレハ三十ヲ以テ一百二十ヲ除シ以テ四ヲ得ル即四時間ナリ、

第三則

時間ヲ以テ速カニ乘シ其距離ヲ定ム例へハ蒸氣船アリ一時間ニ七里ノ速カヲ以テ二十時間ヲ走ルトスルトキハ二十ニ七ヲ乘シ以テ一百

四十里ヲ得ル即其距離ナリ、  
 動ニ等、不等、ノ別アリ之ヲ分チテ三種トス、曰ク  
 等動、曰ク加速動、曰ク減速動、是ナリ、即物體ノ進  
 行スルニ終始緩急ノ差ナク同シ時間ニ同シ距  
 離ヲ過キ絶エス其速カヲ同クスルモノ之ヲ等  
 動ト名ツケ、又動體ノ進ムニ應ニ漸ニ速カノ加  
 ハルモノ之ヲ加速動ト名ツケ、其次第ニ減スル  
 モノ之ヲ減速動ト名ツケ、蓋外カ來リテ體ヲ動  
 カストキハ其體必等動ヲ起スヘキモノトス、例  
 ハ杖ヲ取り球ヲ擡チ或ハ手ノ石ヲ投ル時ノ

如キ理ニ於テ皆等動タルヘシ、其故ハ若地ノ引  
 カ及空氣ノ抗抵全ク其動ヲ妨クルコトナクハ  
 其速カモ亦變スルコトナク永久直行シテ止マ  
 サル可キニ因レリ、然レトモ動體皆他カノ加ハ  
 ラサルコトナキヲ以テ人常ニ等動ヲ見ルコト  
 甚稀ナリ、又物體ニ一二ノ力次第ニ相加ハルト  
 キハ加速動ヲ起ス可シ、例ハ高處ヨリ石ヲ落  
 スカ如キ此石ノ墜下シテ地上ニ近ツクニ從ヒ  
 引カ漸ニ加ハリテ其速ヲ増ス、故ニ墜體ハ初ノ  
 一秒時間ニ十六尺ヲ過キ、次ノ一秒時間ニハ之

改正勿里第 卷上 三十三 文部省

增補才理附林 卷上

ニ三倍シ、相次テ五倍シ七倍シテ、終ニ千百ニ至  
ルト雖モ秒時ノ數ニ應シテ其落ルニ速カヲ増  
スコト、正シク一三五七九ト奇數ノ割合ノ違ヘ  
ナルモノナリ、因リテ樓閣ノ高低洞井ノ深淺等  
モ亦其頂邊ヨリ石ヲ投シ其下底ニ達スル時間  
ノ長短ニ從ヒ以テ之ヲ測定スルコトヲ得ヘシ、  
乃<sup>+</sup>時間ヲ自乘シテ之ニ重力十六尺ヲ乘シテ、知  
ル可シ又動體ノ進行スル其方位ニ相反スルカ  
ノ加ハルトキハ減速動ヲ起ス可シ、例ヘハ球若  
クハ石ヲ取リテ高ク直線ニ抛揚スルカ如キ其

文部省

初ハ地ノ引カニ反シテ昇ルト雖モ引カ仍<sup>ホ</sup>之ヲ  
地上ニ引クカ故ニ漸ニ其速カヲ減シ以テ進行  
ヲ止メ、終ニ復<sup>レ</sup>地面ニ向ヒテ還<sup>ル</sup>落<sup>ル</sup>シ來ルトキハ  
引カノ爲ニ其速カ次第ニ相加ハル故ニ物體ノ  
昇降スル時間ノ長短ハ共ニ同一ナルヲ悟ル可  
シ、

第五課 運動力論 又運動量

運動カトハ動ノ量及<sup>ヒ</sup>動體ノ靜體ヲ擊ツカヲ云  
フナリ 譯者曰 密氏ノ格物書ニ曰フ此運動カト  
スル所ナレトモ相類似スルヲ以テ往ヤ人ノ混  
輒ク解シ難キカ故ニ姑ク原本ニ從フノ初學ノ今

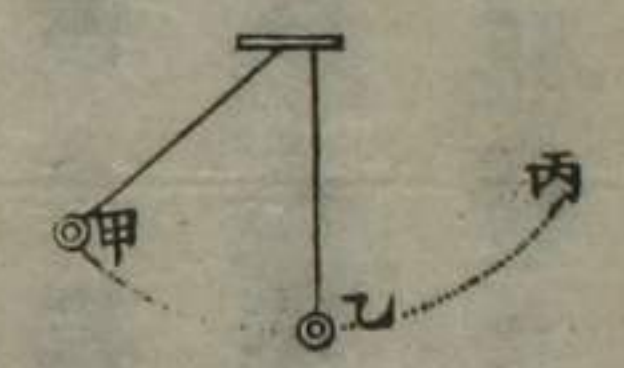
改正 勿里白第 卷上 三三 文部省

動體ノ運動スル分量即運動力ヲ驗スルノ則アリ、動體ノ速力ニ其重量ヲ乘シ以テ之ヲ算定ス可シ、例ヘハ重量六斤ノ物體アリ一秒時間ニ二里行クトスルカ如キニト六トヲ乘シ以テ十二ヲ得ル、是則其體ノ運動力ナリ、又動體ノ他物ヲ拍擊スルカヲ指シテ擊カト名ツケ、而シテ其體ノ速力大ナレハ他ノ物ヲ擊ツカモ亦從テ大ナリ此擊力ノ強弱ヲ驗知スルノ則モ速力ヲ自乗シテ其重量ヲ乘スレハ則得ヘシ、故ニ運動力ヲ算定スル法ト大異ナレ、又動體ニ衝動アリ静體

ニ反動アリ衝動トハ動カノ作用ニシテ動體ノ静體ヲ擊チ以テ衝キ抵ルヲ曰ヒ、反動トハ静體之力爲ニ抗抵力ヲ起シテ其動體ヲ衝キ反スヲ曰フ、蓋反動ノ強弱ハ衝動ノ強弱ニ應シテ其衝強キキハ激モ亦強カラサルヲ得ス、故ニ衝ト激トハ常ニ其力ノ方向ヲ反シテ強弱ヲ同クスルモノナリ、今茲ニ一二ノ例ヲ舉ケテ之ヲ示サンニ、第七圖ハ兩線ノ端ニ大小輕重相同シキ象牙若クハ他ノ彈カアル球ヲ繫ゲルモノナリ、即其甲球ヲ一方ニ引揚ケテ放ツトキハ其球降リテ

改正勿里皆精

第七圖



球ニ附與シテ之ヲ他邊ニ飛揚セシムルコト、初

甲球ヲ舉ケテ落シタル高ニ等シキ丙ニ至ラシ

ムヘシ又第八圖ノ甲乙丙丁戊ハ五個ノ象牙球

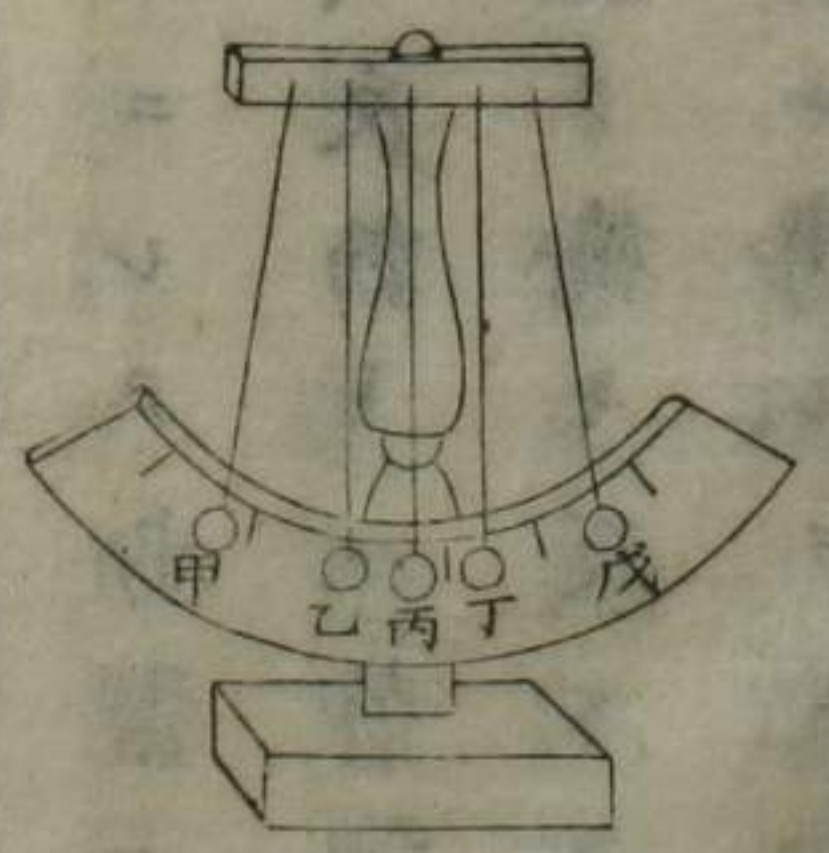
ニシテ各同重ナル者ヲ彎形

前面ニ連綴シ以テ其昇降ノ

度ヲ量リ易カラシメ、而シテ

之ヲ接通スルコト前ノ二球

第八圖



乙球ニ衝突スルニ必、相齊シキ

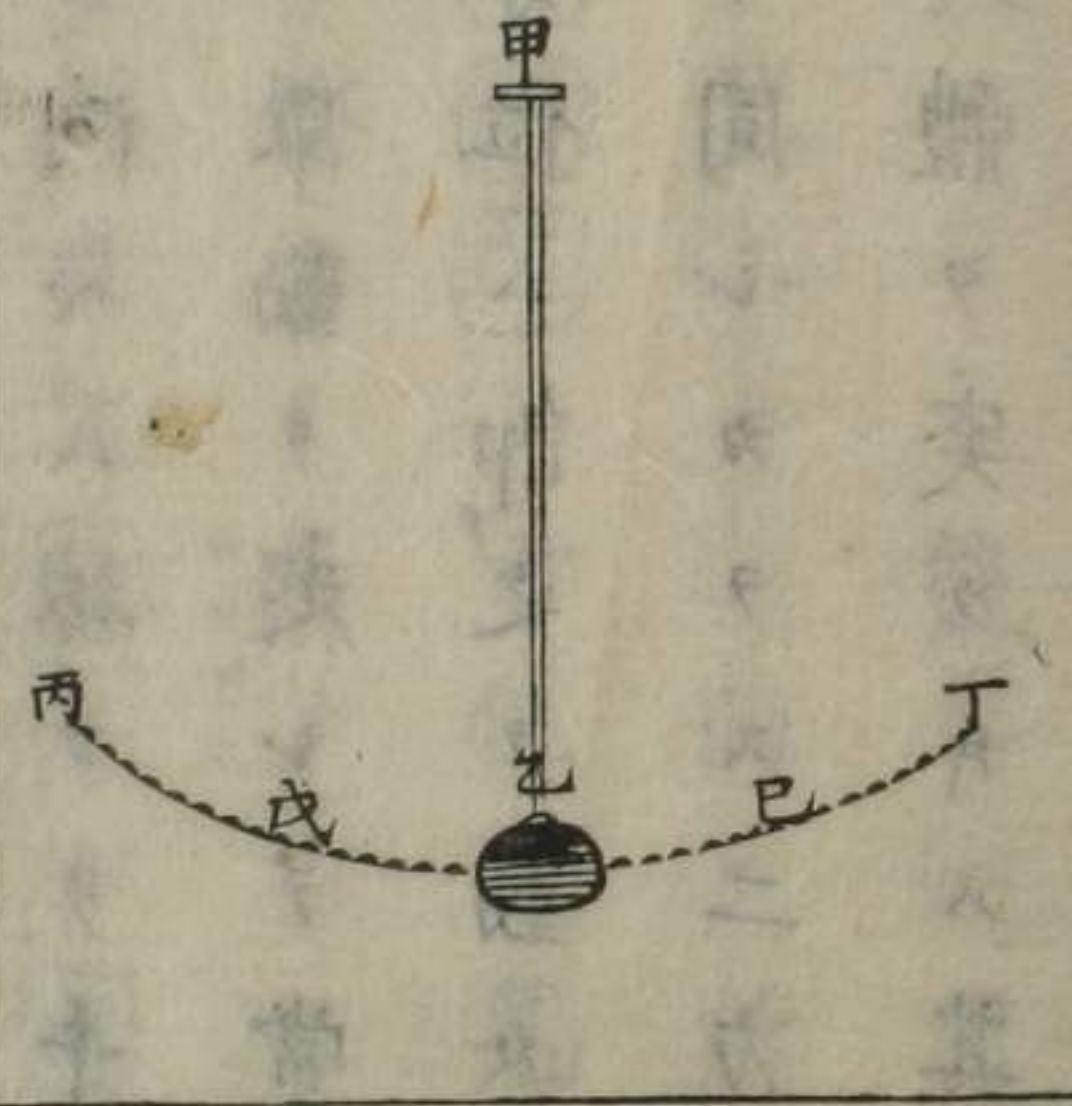
強弱ヲ以テ乙球ヨリ激ヲ受ケ、

甲球爰ニ止ルト雖モ、其動力乙

ヲ以テセシカ如ク甲球ヲ直線ヨリ一尺ノ高ニ  
引揚ケテ之ヲ落スニ乙ヲ衝キテ其動力ヲ傳へ  
且乙球ヨリ激ヲ受ケテ爰ニ静止スト雖モ乙ハ  
甲ノ送リタル動力ヲ丙ニ遞附レ、丙亦之ヲ丁ニ  
附シ、丁亦之ヲ戊ニ附シテ、戊ハ之ヲ傳フヘキ者  
ナキカ故ニ終ニ他邊ニ昇ルコト初甲ヲ落シタ  
ル距離ニ等シク一尺ノ高ニ達スヘシ  
搖錘ハ線ノ一端ニ球若クハ錘ヲ繫キテ他ノ一  
端ヲ釘ニ懸ケ、其球ヲシテ左右ニ動キ自在ニ掉  
搖セシメ以テ時刻ヲ測ルモノナリ、而シテ此球

ノ一昇一降ヲ全振ト名ツク蓋此動ノ如キモ亦  
 引カノ致ス所ニシテ第九圖中甲乙ノ距離ヲ搖  
 錘ノ長ト曰ヒ此球ノ經歷スル曲線路ヲ彎形ト  
 曰フ爰ニ二箇ノ搖錘アリテ其線ノ長短ヲ同ク  
 スルトキハ球ノ掉搖スル其彎形大小ノ異ナル  
 アリト雖モ敢ヘテ時ノ長短ニ關涉スルコトナ  
 カルヘシ例ヘハ下圖ノ如ク甲乙ハ搖錘線ノ長  
 ニシテ丙丁及戊己ハ其振搖スル彎形ナリ若乙  
 ノ球ヲ戊ニ旋ラシテ之ヲ放ツトキハ其球翻テ  
 他邊ノ己ニ到ル可ク又更ニ之ヲ丙ニ昇セテ放

第九圖



テハ其降リテ丁ニ到ル  
 ニ時ノ長短殆初ニ異ナ  
 ルコトナシ其故ハ搖錘  
 ノ經歷スル彎形益大ナ  
 レハ其速力愈加ハリテ  
 旋轉益急ナルニ因レリ然レトモ搖錘ノ全振中  
 其經ル所ノ時間ハ搖錘線ノ長短ニ屬スルカ故  
 ニ其線愈長ケレハ其振愈緩ナリ又一分時間ニ  
 六十振アル者ハ即時計ノ如ク一秒其長大約二  
 尺九寸七分ノ者トス蓋時辰儀ハ搖錘線ノ長短

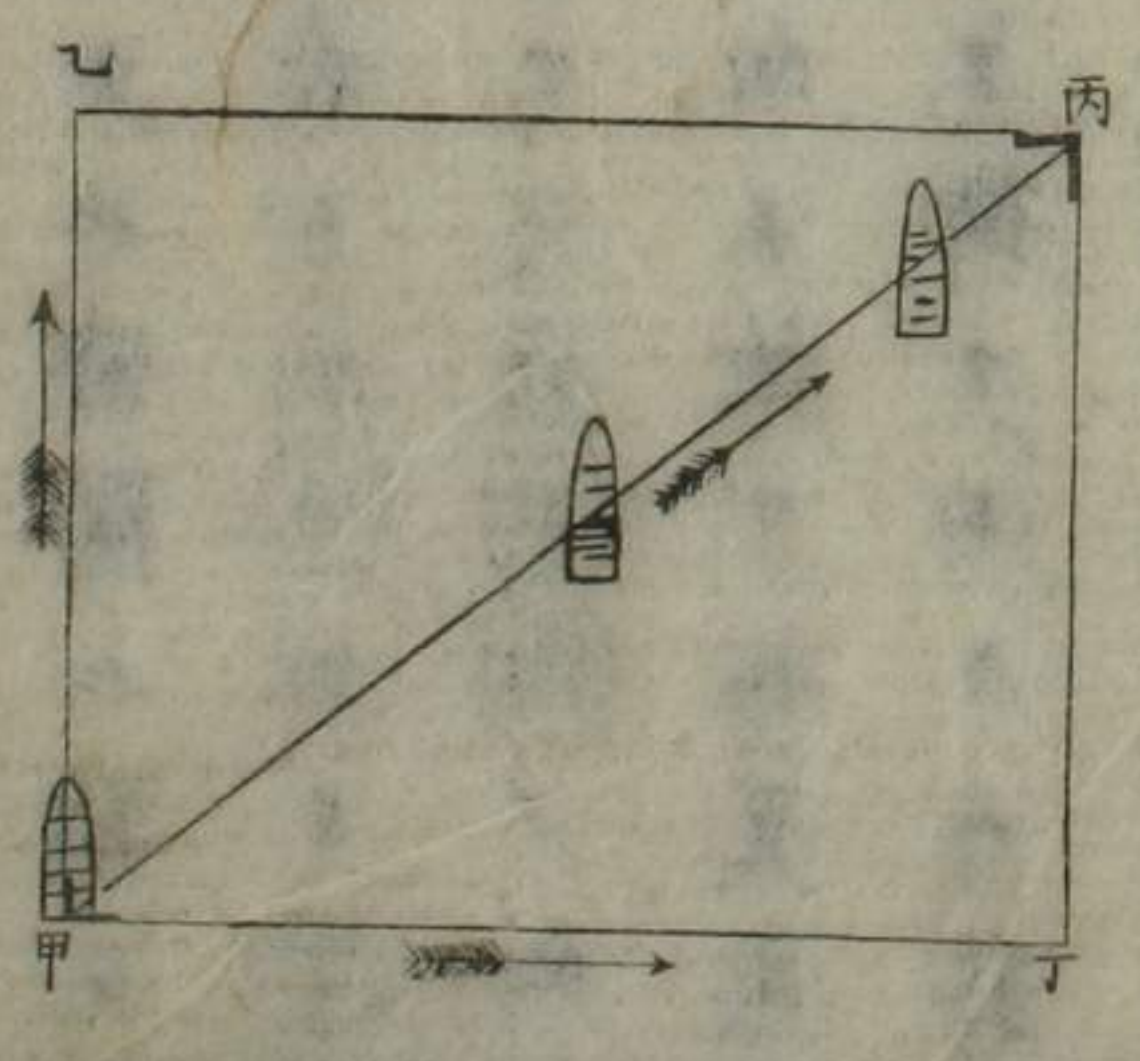
ニ應レテ其度ヲ調フ、故ニ其線ヲ長クスレハ緩  
ニ動キ短クスレハ急ニ動クモノナリ

第六課 單動及複動論

動ニ又單複ノ別アリ單力ニ因リテ動クモノ之  
ヲ單動ト曰ヒ、衆力ニ因リテ動クモノ之ヲ複動  
ト曰フ、例ヘハ球アリ手ヲ以テ之ヲ投ルトキノ  
如キハ單動ヲ起シテ常ニ直行スヘク、且其向フ  
所ノ方位ハ即之ヲ動カスカノ向フ所ナリ複動  
ハ之ト同シカラスニ力各其向フ所ヲ異ニシ相  
與ニ一體ヲ突クハ其體同時ニ其ニ力ノ向フ

所ニ從フコト能ハス、因リテ更ニ一線ノ行路ヲ  
得テ其ニ力ノ向フ所ノ中間ニ進ム、即第十圖  
中(甲)(乙)(丙)(丁)ノ方位ヲ見テ其理ヲ曉知スヘシ、例  
ヘハ小舸アリ舟子ハ之ヲ(甲)ヨリ(乙)ニ向ヒテ盪  
シ、流水ハ之ヲ(甲)ヨリ(丁)ニ  
向ヒテ送り、同時ニ各其向  
フ所ノ點ニ達セシメント  
スルカ如キ、即此舸ハ(乙)或  
ハ(丁)ニ行クコト能ハスシ  
テ其中間ノ(丙)ニ赴クヘシ

第十圖



改正 勿里答弟 卷上

三七

支那館

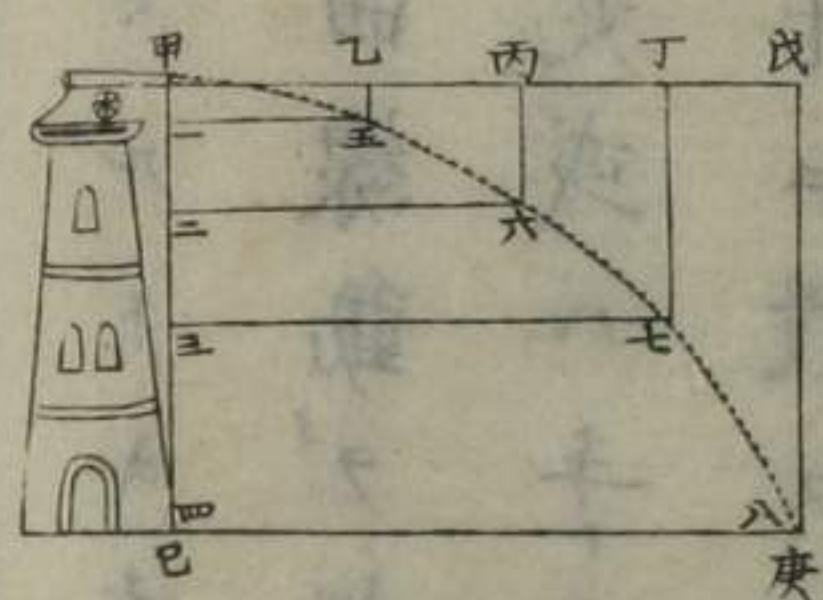


且其(甲)ヨリ(丙)ニ達スルニ經過スル時間ハ別ニ  
 單カニ因リテ(甲)ヨリ(乙)ニ至リ、若クハ(甲)ヨリ(丁)  
 ニ到ルノ時間ト相異ナルコトナレ、此(甲)(丙)ノ斜  
 線ヲ對角線ト名シク、又兩カ其向ノ所ヲ相反シ、  
 強弱ヲ齊クシテ同時ニ一物體ヲ衝クトキハ、其  
 體依然トレテ其處ニ静止ス之ヲ二カノ平均ト  
 云ス、  
 又動ニ曲直ノ名アリ、動體ノ進ムニ一直路ヲナ  
 スモノ之ヲ直線動ト曰ヒ、屈撓シテ向ヲ所ヲ變  
 スルモノ之ヲ曲線動ト曰ス、蓋此二動ハ單カニ

以テスルトキ直線動ヲ起シ、衆カヲ以テスルト  
 キハ曲線動ヲ起ス可シ、又砲ノ彈射スル所ノ火  
 箭銃丸或ハ手ヲ以テ抛飛シタル石等ノ如ク物  
 ノ空中ニ投スルトキハ其物ヲ指シテ射擲物ト  
 名ツケ之ヲ擲ツカヲ指シテ擲射カト名ツク、此  
 カ亦其方位ニ從ヒ以テ其名ヲ異ニス、即一物體  
 ヲ擲テテ直線ニ昇降セシムルトキハ之ヲ直垂  
 ノ擲射カト曰ヒ、又水準ト平行シテ擲ツトキハ  
 之ヲ地平ノ擲射カト曰ヒ、其他ノ方向ニ擲ツト  
 キハ之ヲ傾斜ノ擲射カト曰ス、又一物體ヲ擲ツ

トキハ之ニ加ハルカ三アリ曰ク擲射力曰ク其  
 物經歷スル間ノ空氣ノ抗抵力曰ク終ニ之ヲ地  
 面ニ墜下スル重力是ナリ又ニ力擲射力相共ニ結  
 合シテ一物ヲ動カストキ此力ハ敢ヘテ其重力  
 ヲシテ増減ヲ起サシムルモノニ非サルナリ茲  
 ニ圖ヲ以テ其理ヲ示サンニ即第十一圖ノ如ク、

第十圖



既ニ裝藥セシ大砲ヲ砲臺上ニ  
 安置シ、且其臺ノ高サハ球ヲ其  
 上ヨリ落スニ精密ニ四秒時間  
 ヲ經テ地上ニ達スヘキヲ測リ、

而シテ地平ト平行スル**乙丙丁**ニ向ヒテ發放シ  
 其同瞬間ニ球ヲ**甲**ヨリ落セハ此球必ズ彈丸ト同  
 時ニ砲臺下ノ**四八**ナル地平線ニ達ス可シ今此  
 圖ニ於テ**甲乙**ヲ墜球ノ鉛直線トシ**甲五****六****七****八**  
 ヲ彈丸進行ノ曲路トシ**己庚**ヲ砲臺下ノ地平線  
 トス故ニ兩體既ニ進ミテ墜球ハ最初ノ一秒時  
 ニ**一**ニ達シ次ノ一秒時ニ**二**ニ達シ又次ノ一秒  
 時ニ**三**ニ達シ漸次ニ速カヲ増シテ終ニ四ノ地  
 面ニ到ルヘシ又此間ニ彈丸ハ最初ノ一秒時ニ  
 墜球ノ**一**ニ達スルト同時ニ**乙**ニ達ス可キ速力

増補水理附本

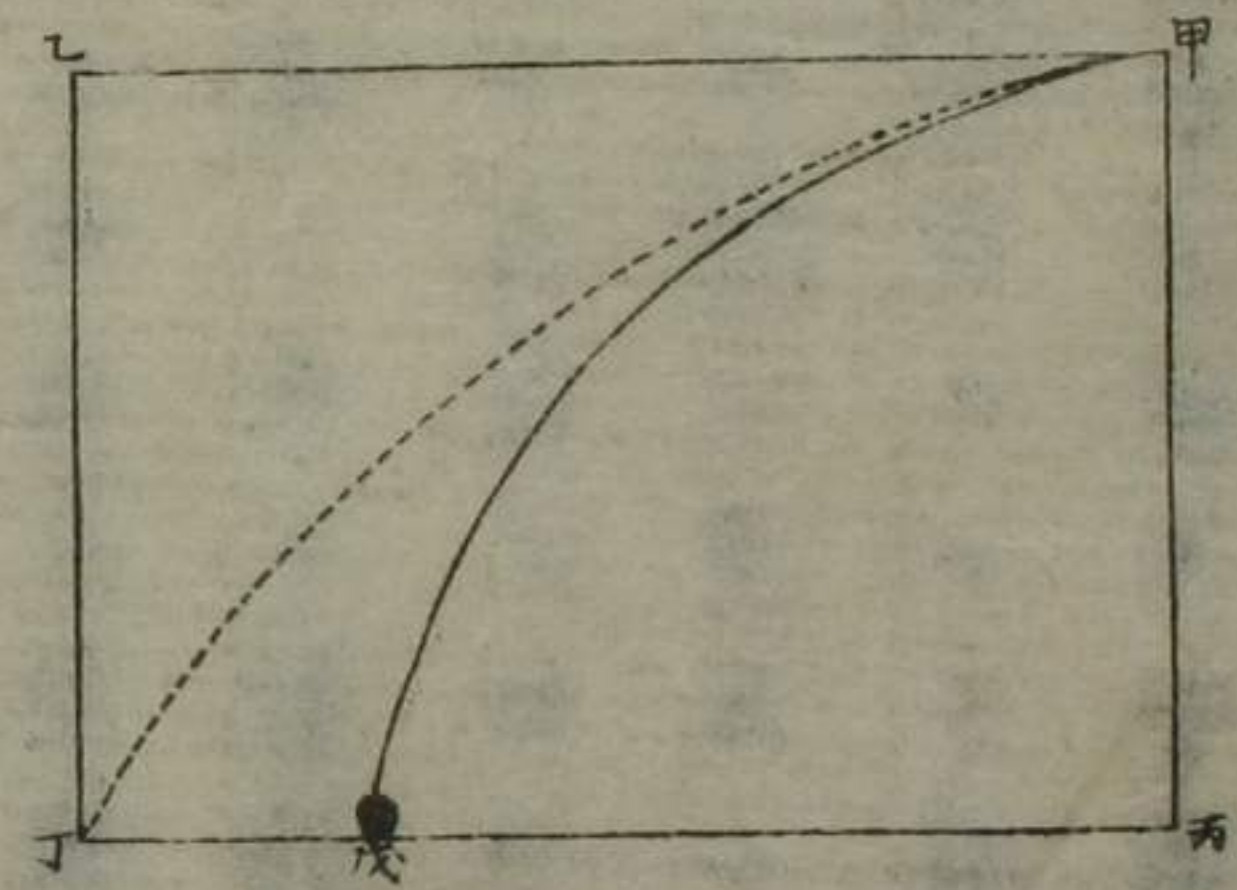
ヲ以テ前進スト雖モ其落ツルコトハ球ト同シ  
 ク(五)ニ到ルコト毫モ球ノ(一)ニ到ルト其時ヲ差  
 ヘサル可シ又次ノ一秒時ニ彈丸(六)ニ到ル時ハ  
 即球ノ(二)ニ到ル時ニシテ又次ノ一秒時ニ於テ  
 球ノ(三)ニ到ルト同時ニ彈丸(七)ニ達シ終リノ一  
 秒時ニ於テ(八)ノ地面ニ達スルト球ノ(四)ニ達ス  
 ル時ト正ニ相同レキモノナリ故ニ地平ニ進行  
 スル動ハ其體ノ重力ニ障碍ヲ爲スモノニ非ラ  
 ス因テ射擲物ハ其前進中ニ於テ唯重力ノミ  
 作用ニ因リ墜下スル者ト其遲速ヲ同クシ以テ

落ル者タルヲ了解ス可シ是蓋擲射カト重力ト  
 ノ二力相合シテ起ルモノトス、而シテ此(甲)(五)(六)  
 (七)(八)ノ彎曲路ヲ主竇線ト名ツク  
主竇線トハ原  
 語ヲパラボ  
 ー  
ラト云ヒ圓錐ヲ斜ニ切  
 リタル形狀ヲ云フナリ、  
 然レトモ之ニ空氣ノ抗抵加ハリテ三力ノ合動  
 ヲ起ストキハ射擲物ノ行路モ亦變ス可シ例ヘ  
 ハ第十二圖ノ如ク擲射力(甲)ニ在リテ此處ヨリ  
 銃丸ヲ(乙)ニ達セシメントスルニ重力ハ之ヲ(丙)  
 ニ落サントシテ此二力ノ合動ナルトキハ銃丸  
 ハ前章ノ如キ彎曲路乃(甲)(丁)ノ點線ヲ畫シテ落

改正力理附本

甲

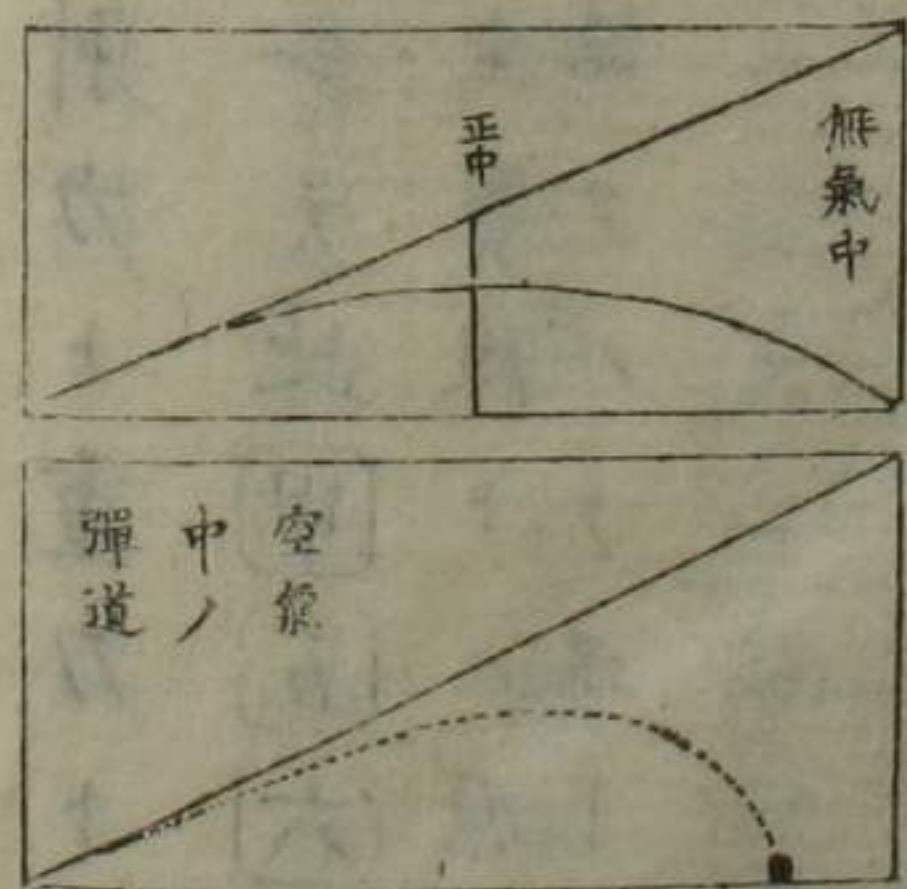
第二十圖



ツ可シト雖モ空氣ノ抗抵力  
直ニ動體ノ行進ニ反シ相加  
ハルヲ以テ(丁)ニ達スルコト  
能ハス傾歛斜行ヲ變シテ(戊)  
ニ墜下ス可シ蓋此曲線路ハ  
擲射力空

氣ノ抗抵力及重力トノ三作  
用ニナルモノトス砲術家之  
ヲ彈道ト名ツク又物體ヲ斜  
ニ向ヒテ擲ツトキハ下圖ノ

第三十圖



如ク落下シ其降路ハ必昇路ヨリ峻ナリ、

第七課 重心論

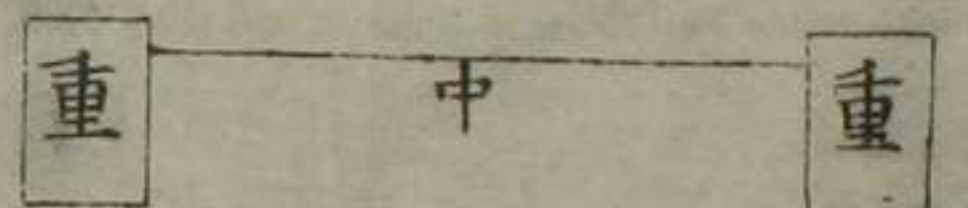
物咸重量アリテ重ノ聚マル所之ヲ重心ト曰フ、  
而シテ其重心ハ體ノ一點ニ在リテ、此一點ヲ支  
係スルハ、以テ諸部ヲ平均セシムルヲ得、例  
ハ、火箸若クハ竹杖ノ如キ、其重心點ヲ求メテ、第

第十四圖



十四圖ノ如ク之ヲ指頭ニ安  
置スルニ其傾歛セサルモノ  
ハ諸部ノ重、此ニ集マレハナ  
リ、故ニ第十五圖ノ(重)中(重)ハ

圖五十第



杖ノ兩端ニ同量ノ重物ヲ懸ケシ  
モ、ノニシテ、其重心〔中〕ノ一點ニア  
リ即、杖ノ中央ナリ又若、其兩端ノ  
重量ニ不同アルトキハ、第十六圖  
ノ如ク、重心

其中央ヲ去テ大體ノ近傍

ニ轉シ、其輕重愈、不同ナル

キハ重心愈、其位ヲ變シテ

大體ノ中ニ入ルコト、第十

七圖ノ如クナルヘシ、

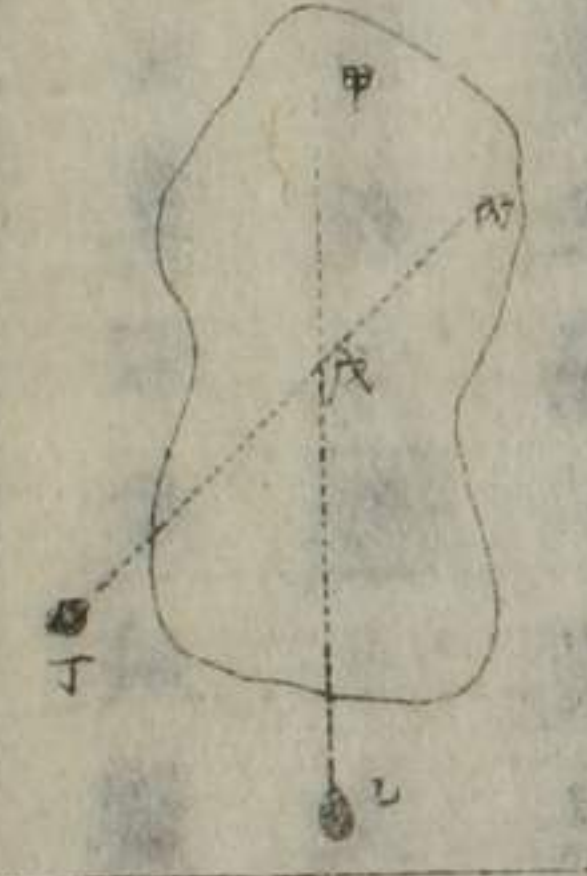
圖六十第



圖七十第



圖八十第

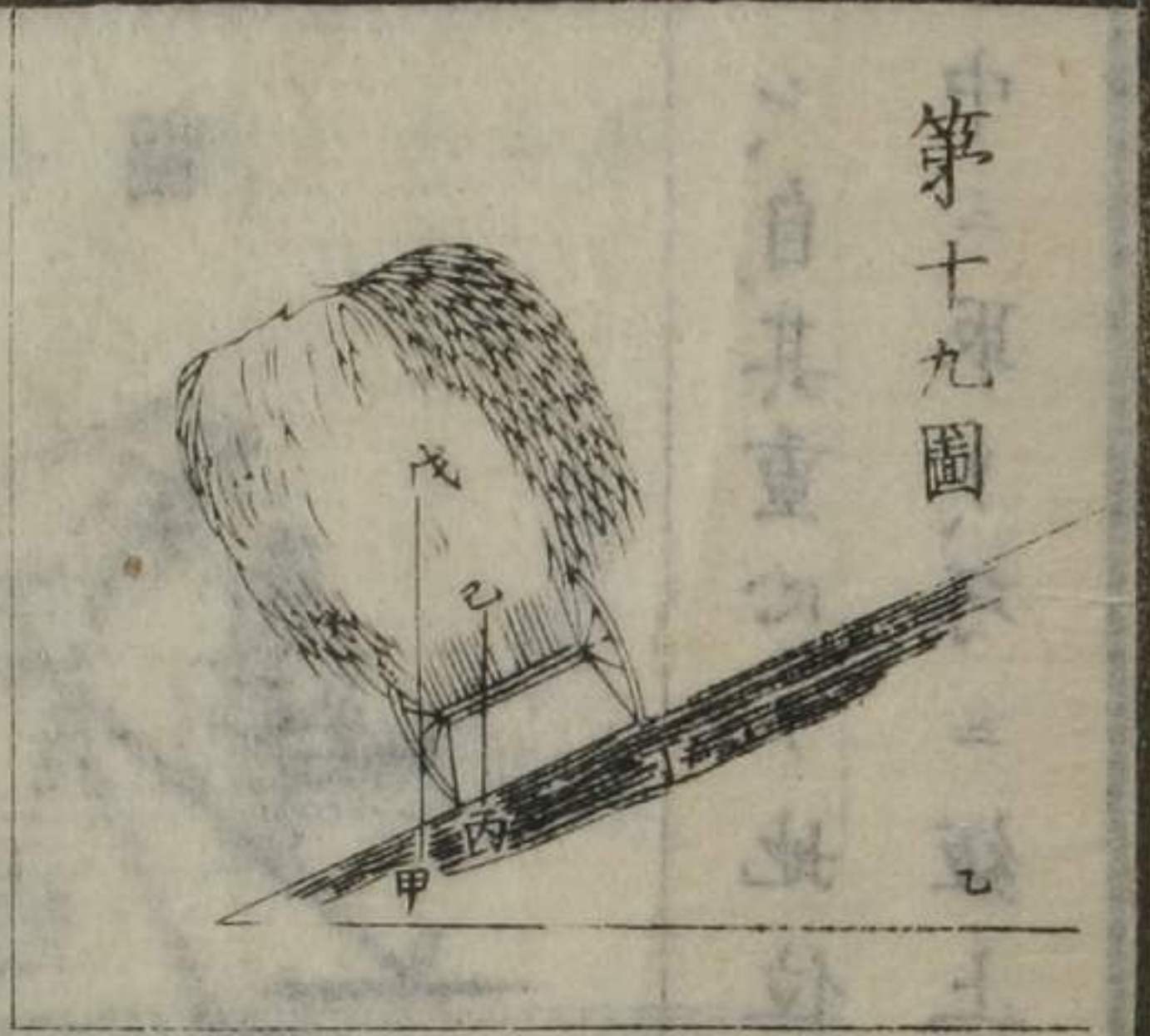


ハ第十八圖ノ如キ形體アリテ  
其重心ヲ知ラムト欲ヤハ先〔甲〕  
ヨリ鉛線ヲ垂レテ〔乙〕ニ向ハシ

物ノ中心ハ形體ノ中央ニシテ重心ハ輕重ノ中  
央ナリ、故ニ物ヲ擔ヒ或ハ支持スルニ當リテ其  
重心點ノアル所ヲ求メサルヘカラス、物體ノ形  
狀方正ニシテ厚薄ノ差ナケレハ其重心モ亦偏  
倚セス、故ニ其重心ヲ求ムル甚易シト雖モ若、形  
狀ノ不正ナル物ニ遇ヘハ其點ヲ得ルコト頗難シ  
然レモ爰ニ一法アリ之ニ依レハ則得ヘシ例ハ

ハ重心必、此線路中ニアル故此線路ヲ板面ニ  
 畫シ次ニ(丙)ヲ上トレテ圖ノ如ク(丙)ヨリ(丁)ニ垂  
 レ其兩線ノ交叉スル處(戊)ハ即此體ノ重心點ナ  
 リ、而レテ此鉛線ヲ重心線ト名ツク、此法ヲ以テ  
 已ニ重心ノ在ル所ヲ知ルルハ物傾斜スト雖モ  
 覆ヲサルニ定度アルコトヲ知ル又第十九圖ハ  
 物ヲ積載シタル輜車、丘陵ノ險路ヲ過クルモノ  
 ニシテ(甲)(乙)ノ一線ヲ地平線トシ(丙)(丁)ハ、車輪ノ  
 下底ナリ、此輜車ノ積量寡ク重心(巳)ニ在ルトキ  
 ハ(巳)(丙)ノ重心線下底中ニ在リテ其車覆ルコト

第十九圖

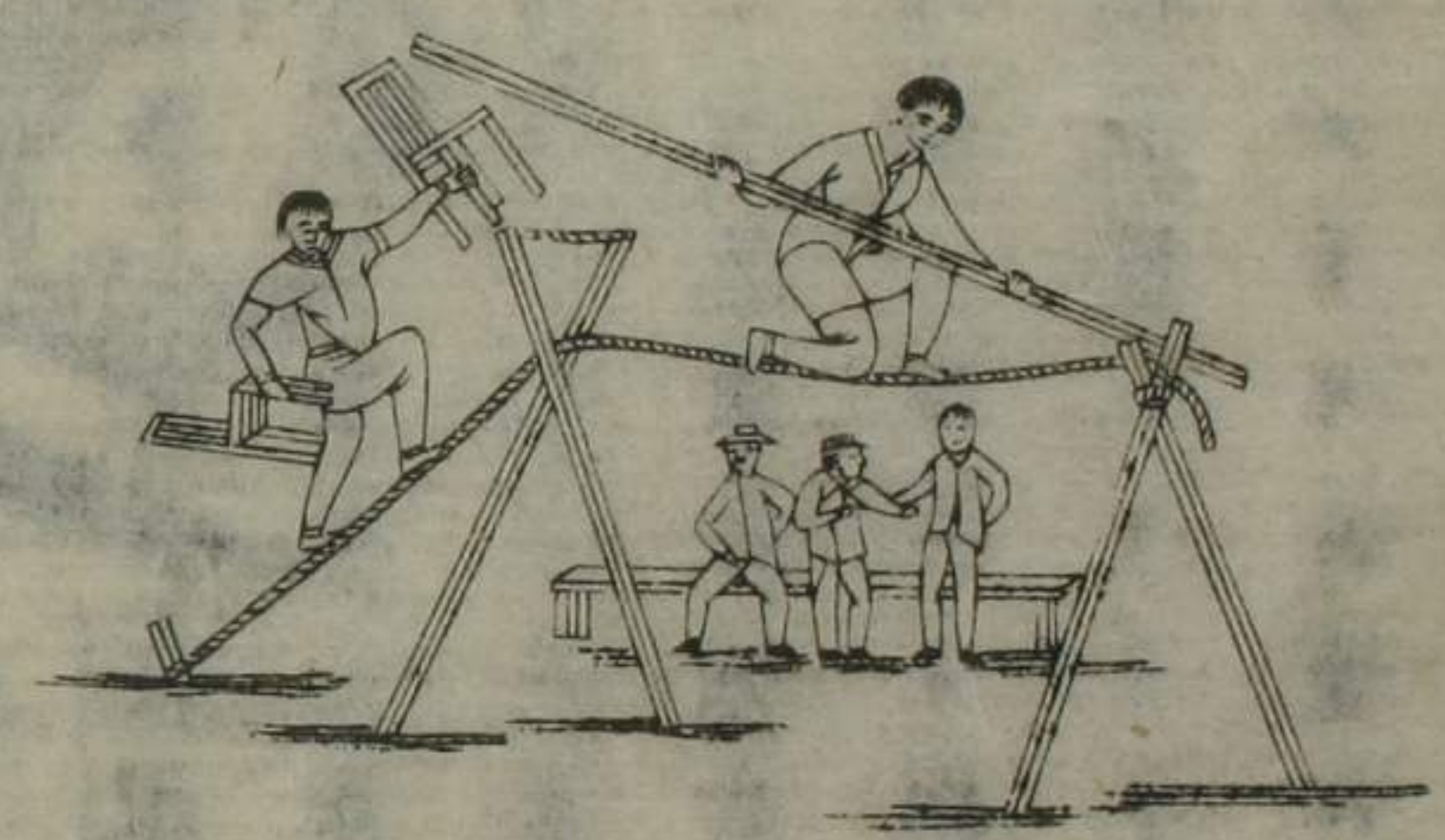


ナニト雖モ、若多クシテ重心  
 (戊)ニ昇ルトキハ(戊)(甲)ナル重  
 心線下底ノ外ニ出ルヲ以テ  
 其車下顛覆スヘシ故ニ今輜  
 車若クハ馬車ノ如キ、平坦ノ  
 路ヲ行クトキ直立シテ、安キ  
 ヲ得レハ、其重心線常ニ兩輪ノ間ニ落チテ、下底  
 ノ外ニ出テサルニ因レリ、夫、人身ノ重心ハ、下腹  
 ノ最低股間ニアリテ其兩足ヲ下底トス故ニ人  
 直立スルトキハ、重心線、此下底中ニ落ツト雖モ、

改正 勿里皆弟 卷上

増補  
文部省  
...

第十二圖



シ、自其重心ノ地位ヲ變シテ重心線ヲ已<sub>レ</sub>下底  
中ニ取り、巧ニ繩上ニ居テ、顛墜ノ患ナク其技藝

若一方ニ傾歎スルトキ  
ハ、重心其位ヲ變スルニ  
因リ、久レク立ツコト能  
ハズ因<sub>テ</sub>踏<sub>フ</sub>繩子ハ常ニ  
重杖若クハ傘ヲ持レテ  
其位置ヲ變スルニ應<sub>ジ</sub>  
テ重量ノ偏倚ヲ補フハ  
キ爲ニ之ヲ左右ニ運轉

ヲナスヲ得ルナリ、又第二十一圖ノ如ク人ノ峻

第十二圖



第二十二圖



レキ山路  
ヲ越ユル  
ニ、其登ル  
トキハ、常  
ニ其體ノ

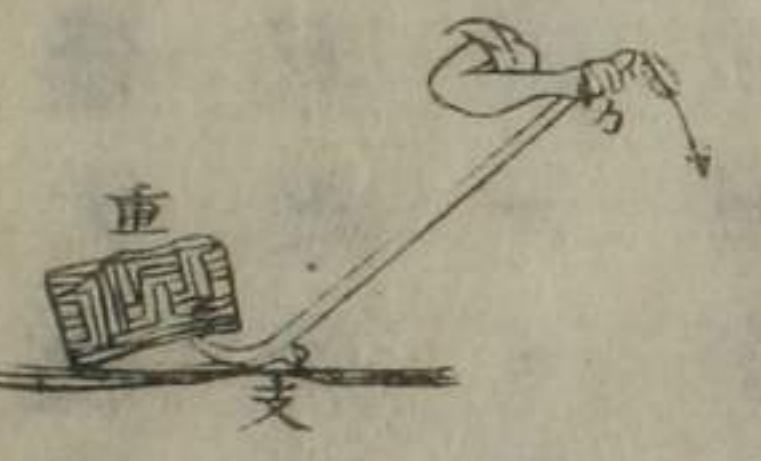
前ニ屈シ、降ルトキハ、後ニ伸シ、又第二十一圖ノ  
如ク一手ニ重物ヲ提クル者ハ、必<sub>ズ</sub>其空手ヲ一方  
ニ延ハス、亦此理ニ同シ、

第八課 運重器 槓杆論

改正 物理學 卷上 四 文部省

物體ヲ動カスニ、器械ノ力ヲ藉ルトキハ、人カヲ  
 費サスシテ、其成功ヲ見ルノ驚クヘキモノ歟ナ  
 カラス、例ヘハ、人若木槌ヲ用井ルトキハ、至重ノ  
 木石ト雖モ、之ヲ提擽スルニ至ルヲ得ル類ノ如  
 シ、槓杆ハ其器械ノ一ニシテ堅牢ナル槌ノ一點  
 ヲ支磯上ニ置キ、自在ニ動カスベキモノナリコ  
 レニ標スルニ三點ヲ以テス、即其一ヲ、力點ト曰  
 ヒ、力勢ヲ加フル所ナリ其ニヲ重點ト曰ヒ、重物  
 ニ接スル所ナリ、其三ヲ支點ト曰ヒ、槓杆ヲ支撐  
 シテ、レガカシキ 提擽ヲ爲スノ所ナリ、今通常ノ槓杆ヲ分テ

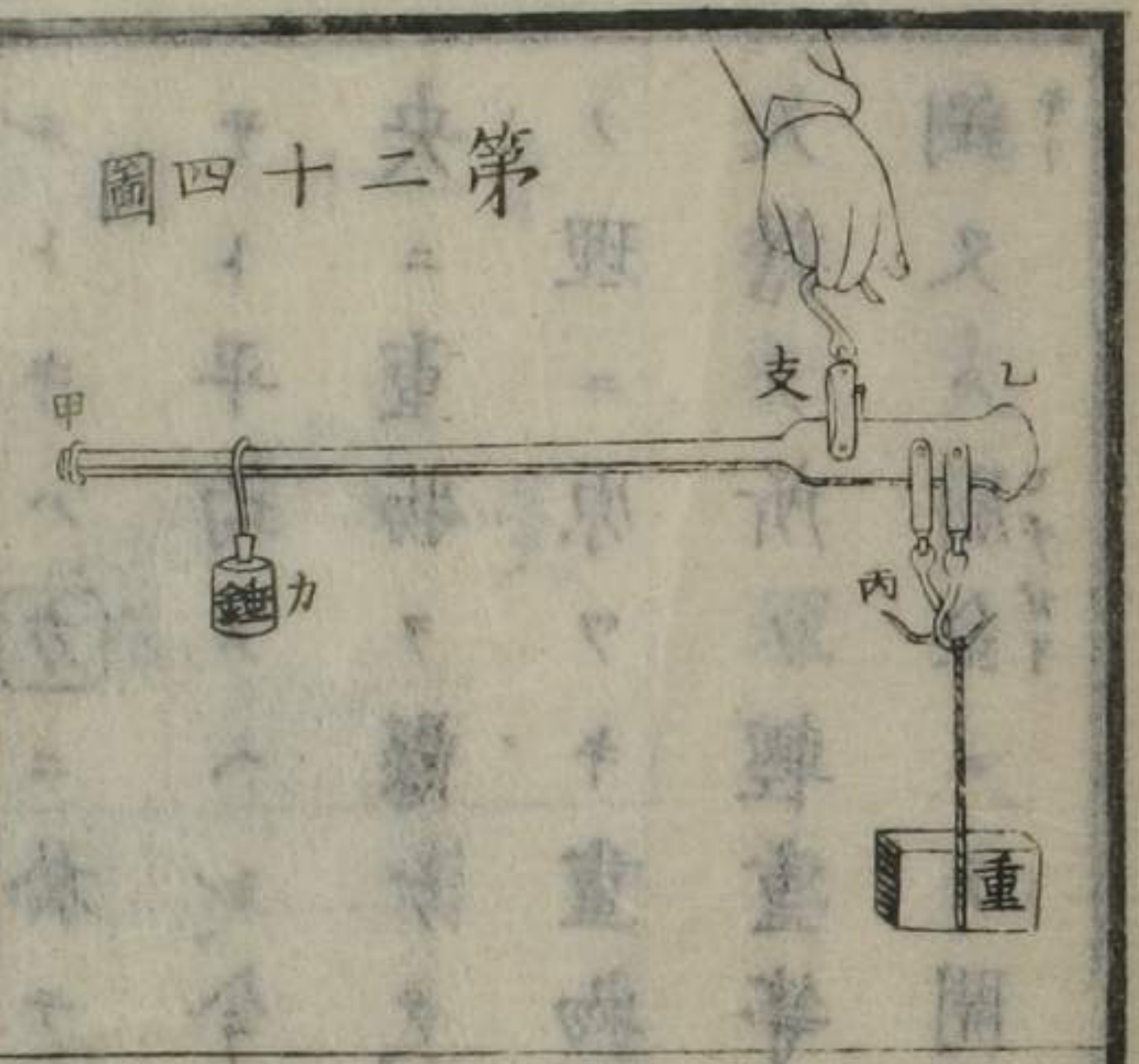
一、三種トシ、三點ノ所在ニ從ヒテ、第一種、第二種  
 第三種トス、即第一種ノ槓杆ニ於テハ、重點一端  
 ニ在リ、力點他端ニ在リテ、支點其間ニ在リ、之ヲ  
 掲ト名ツク、第二十三圖ハ其狀ヲ示スモノニレ  
 テ其杆ヲ支ノ磯上ニ置キ、自在ニ動カスヘク、重  
 ハ提擽スヘキ、重物ニテ、力ハ其重物ヲ提擽スル  
 力勢ナリ、此種ノ槓杆ヲ用井ル  
 ニハ、力點ト支點ノ間ヲ長クス  
 ルニ從ヒ、重物ノ量愈輕キヲ覺  
 ヲ、故ニ今力支ノ間ヲ重支ノ間



改正 物理學門 卷上 甲五



ヨリ二倍ノ長サトスルトキハ、百匁ノ力ヲ以テ能ク二百匁ノ重サヲ動カスヘシ然レトモ力ニ得ル所アレハ從テ亦時ニ費ユル所アリテ、槓杆及他器ヲ用井ルノ法皆然リトス、蓋平常用井ル所ノ等子ハ此槓杆ノ理ニ因ルモノニシテ、其製ハ物ノ重量ヲ科リ知ルヘキ爲ニ衡ノ上邊ニ秤星ヲ標シ、其衡上ニ移動スヘキ錘ヲ掛ケ、且三個ノ鈎ヲ付シテ、其最端ナル鈎ハ秤量スヘキ物ヲ懸ケ他ノ二鈎ヲ把手トナシテ、其兩鈎ノ樞軸ハ之ヲ支磯ニ代フルモノナリ、即第二十四圖ノ如

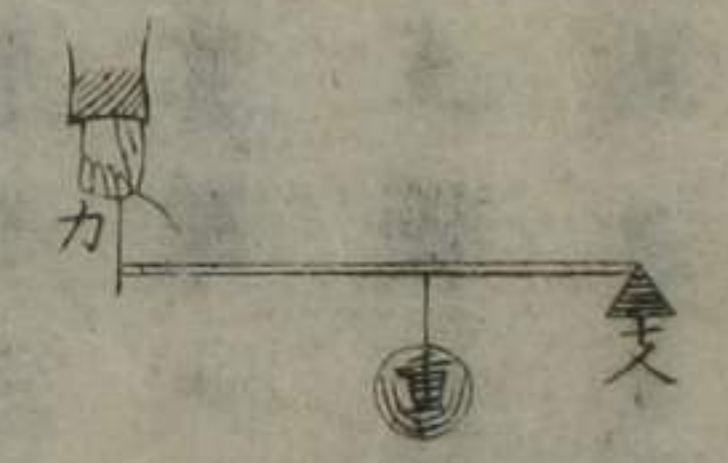


ク若シノ鈎ヲ執リテ權ハトキハ力ハ錘一斤長シテ能ク重ノ物數斤ト相平均スヘシ是カノ兩點相距ルノ長短ハ支重ノ兩點相距ルノ長短ニ數倍ナルニ因レリ、又第二

種ノ槓杆ハ支點一端ニアリ、力點他端ニアリテ、重點其間ニアルモノナリ、之ヲ挑ト名ツク、即第二十五圖ニ於ケル支ハ支點ニシテカハ力點重ハ重點ナリ、此種ノ槓杆ニ在リテハ力重ノ隔重

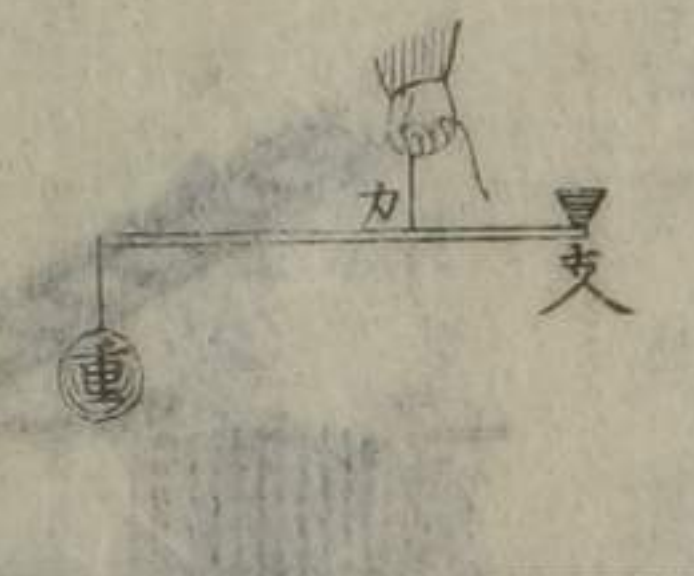
改正 物理學 卷上 四六 支重

圖五十二第



支ノ隔ヨリ、其間長キトキハ、力勢  
 小ニシテ能ク重キヲ提舉ス、故ニ、  
 力ヨリ重ニ至ルマテノ長短重ヨ  
 リ支ニ至ルマテノ長短ニ四倍ス  
 ルトキハ力ニ於テ一斤ノ力重ニ於テ四斤ノ重  
 サト平均スヘシ、今茲ニ強弱ノ兩人アリ、搦ノ中  
 央ニ重物ヲ懸ケテ、運輸セントスルニ、此種槓杆  
 ノ理ニ原ツキ重物ヲ其一人ニ近クルトキハ、兩  
 人擔ヲ所ノ輕重等シカラス、又通常見ル所ノ藥  
 罏又ハ肘金ニテ開閉スル門扉等ノゴトク、其一  
 キリヒチガキトビラ

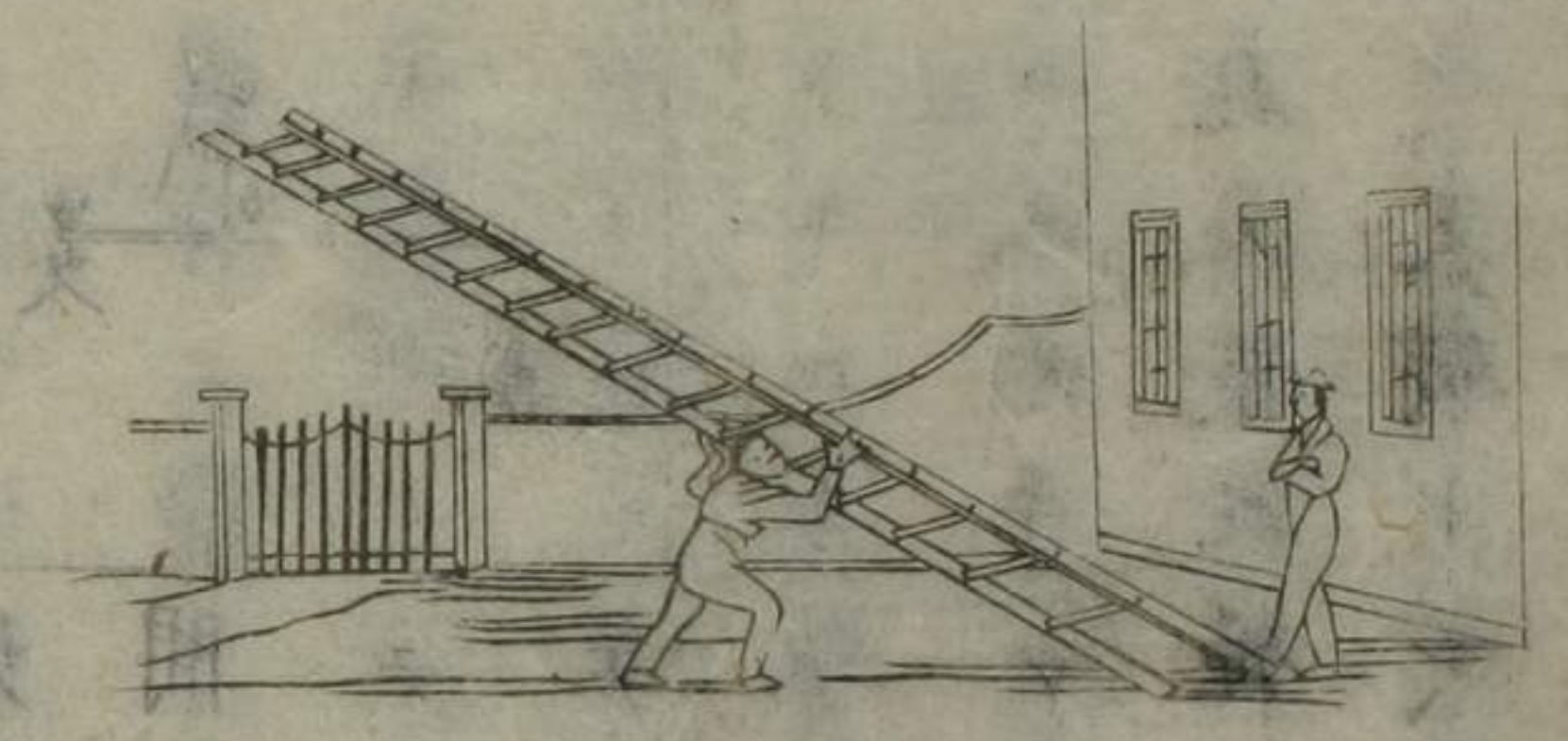
圖六十二第



端ヲ支點トシ、他ノ一端ヲ力點トスルモノ、亦皆  
 此槓杆ノ理ニ原ツクモノナリ、又第二十六圖ノ  
 如ク兩端ニ支點ト重點アリテ其  
 間ニ力點アル者ハ第三種ノ槓杆  
 ニシテ之ヲ提ト名ツク此種ニ於  
 テハ、重カノ間長クシテ力支ノ間  
 短キトキハ力勢重量ヨリモ、強カラサルヲ得ス、  
 例ヘハ人兩手ノ力ヲ以テ、第二十七圖ノ如ク長  
 梯ヲ起スモ、此種ノ理ニ出テ、其一端地面ニ接ス  
 ル所ヲ、支礎トシ、其上部ヲ重量トシテ之ヲ起ス

增補のり所  
卷上

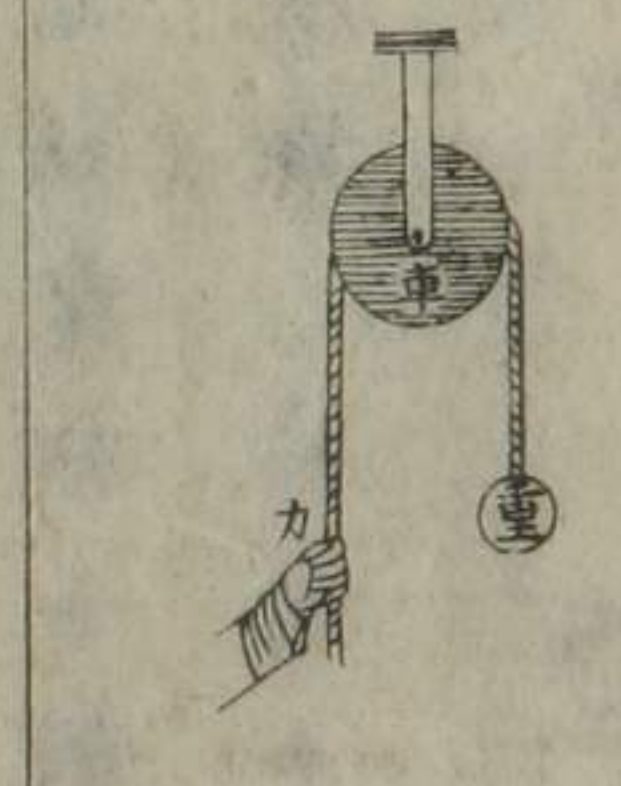
第七十二圖



キハ極ノ便ナリ、蓋滑車ハ其周圍ノ兩傍高ク  
シテ中ニ槽アリ、此凹處ニ繩ヲ含マシメ、之ヲ引

力、即カ勢ナリ、故ニ力點、地ニ  
近ツクニ從ヒカヲ用井ルコ  
ト愈、多ク、終ニ能ク其全量ニ  
勝ツニ非レハ、之ヲ立ツルコ  
ト能ハザルナリ、  
第九課 滑車論  
人低キ所ヨリ、高キ所ニ物ヲ  
提擧スルニ滑車ヲ用井ルト

第十二圖



ユト多カラスシテ、三尺ノ繩ヲ引キ下ストキ、亦

カニ軸アリテ、旋轉スル小車ニシテ今此滑車ヲ  
分チテ、二種トシ、一ヲ定滑車ト名ツケ、二ヲ動滑  
車ト名ツク、其定滑車ハ軸ヲ旋轉スルノ外、他ノ  
動ナクシテ、重物ヲ引揚ケ、或ハ井水ヲ汲ムノ用  
ニ供ス、即チ第二十八圖ノ車ハ滑車ニシテ軸ハ槓  
杆ノ支點ニ異ナラス、重ハ、引  
キ上ク可キ重物、力ハ、繩ヲ引  
ク力ニシテ力點ナリ、此滑車  
ハ物ヲ舉クルニ、其力ヲ省ク

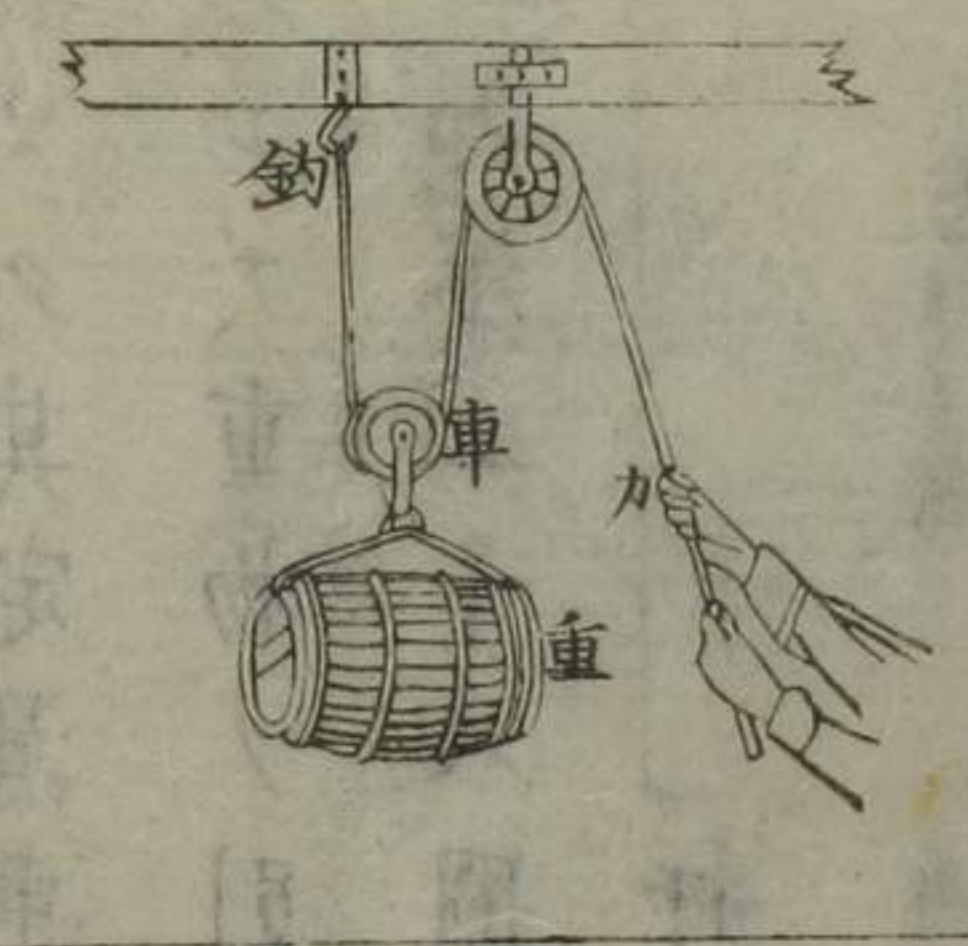
改正  
勿里答第  
卷上

第八  
文部省

増補 物理 卷一

重物ヲ上ルコト三尺ニ過キス、又動滑車ニ在リ  
テハ、車ト重物ト相接シテ、共ニ昇降ヲ爲スニ因  
リ、定滑車ト其趣ヲ異ニス、第三十九圖ノ如ク滑

第 九十二 圖



車ノ下ニ  
鉤アリ之  
ニ重物ヲ  
繫キ繩ノ  
一端ヲ上

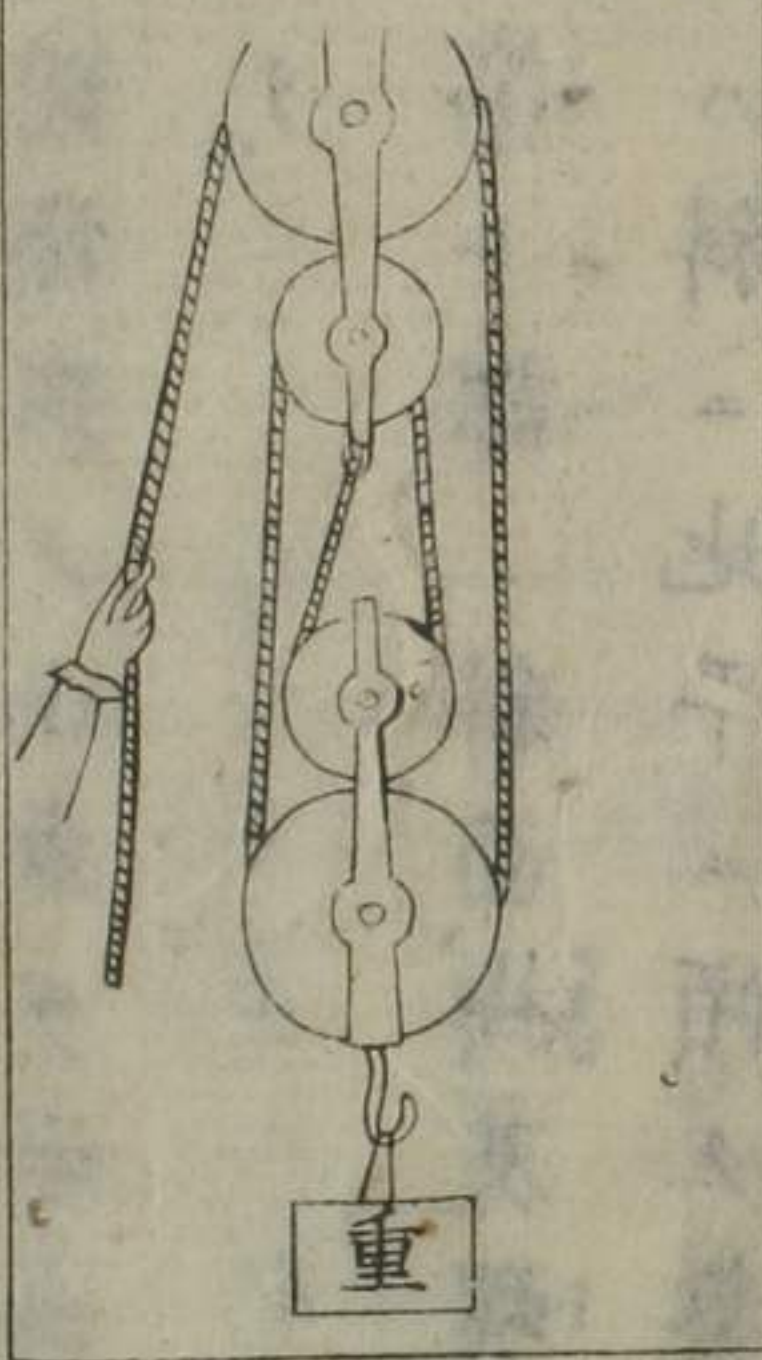
邊ノ鉤ニ掛ケテカノ力繩ヲ挽  
クトキ、重物滑車ト相與ニ上ル、

第 十三 圖



即第三十圖ノ如キ、此滑車ノ理ニヨルモノナリ、  
又第三十一圖ノ如ク四滑車ヲ連合スルモノア  
リ此滑車ハ一斤ノ力

第 十三 圖

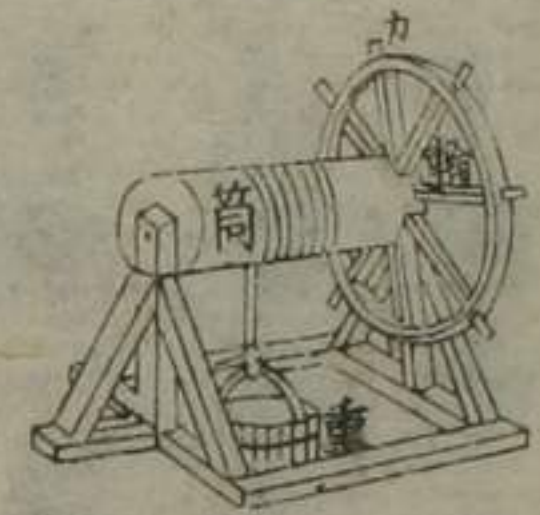


ヲ以テ、能ク四斤ノ重  
ヲ揚クヘシ、此他猶滑  
車ノ製、數種アリト雖

モ、其理ニ於テハ右ノ兩種ト大同小異アルノミ  
因リテ爰ニ略ス、  
輪軸ハ、第三十二圖ノ如ク、輪寶形ノ車輪アリテ  
其軸ヲ筒車ニナシ、旋轉スルニ其中心ノ軸ヲ共

改正 勿里 卷一 第九 文部省

圖二十三第

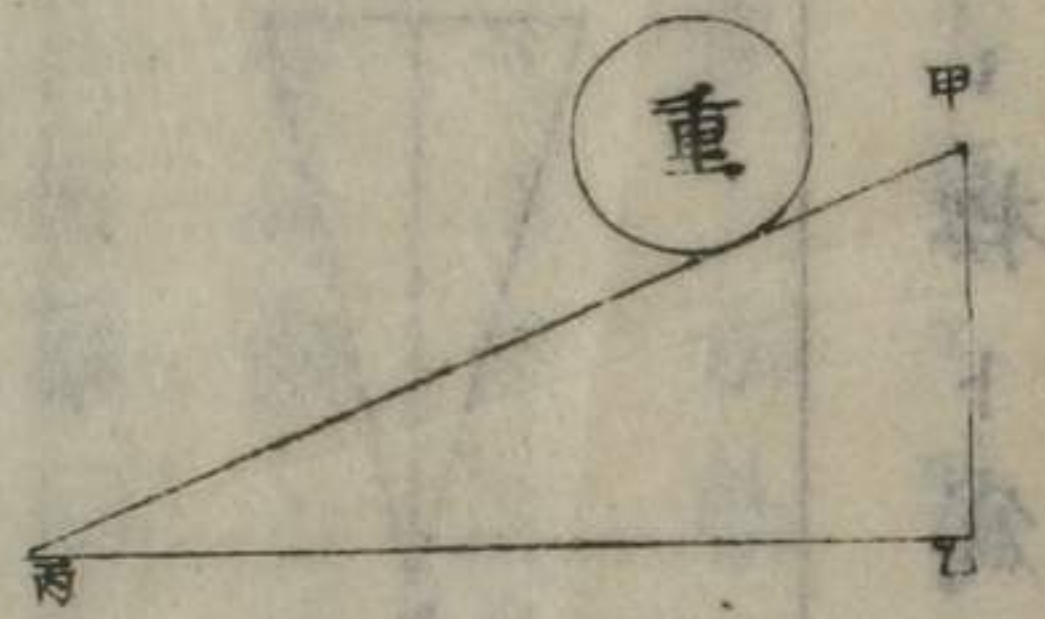


ニスルモノナリ、此製亦數種アリ  
ト雖モ能ク此圖ヲ解セハ他ハ推  
シテ其理ヲ悟ルヘシ、即圖中カハ  
力勢ヲ加フル所ノ大輪ニシテ筒ハ大輪ノ軸ト  
ナル圓筒形ノ小車ヲ示シ、重ハ引キ上クヘキ重  
物ナリ、

第十課 斜面、楔及螺旋論

斜面ハ斜ニ地平ニ傾ク盤面ニシテ、坂路ノ如キ  
モノヲ曰ヒ、其要ハ、重物ヲシテ其斜面上ヲ滑利  
セシメ、以テ其提擡ヲ便ニスルニ在リ、即第三十

圖三十三第

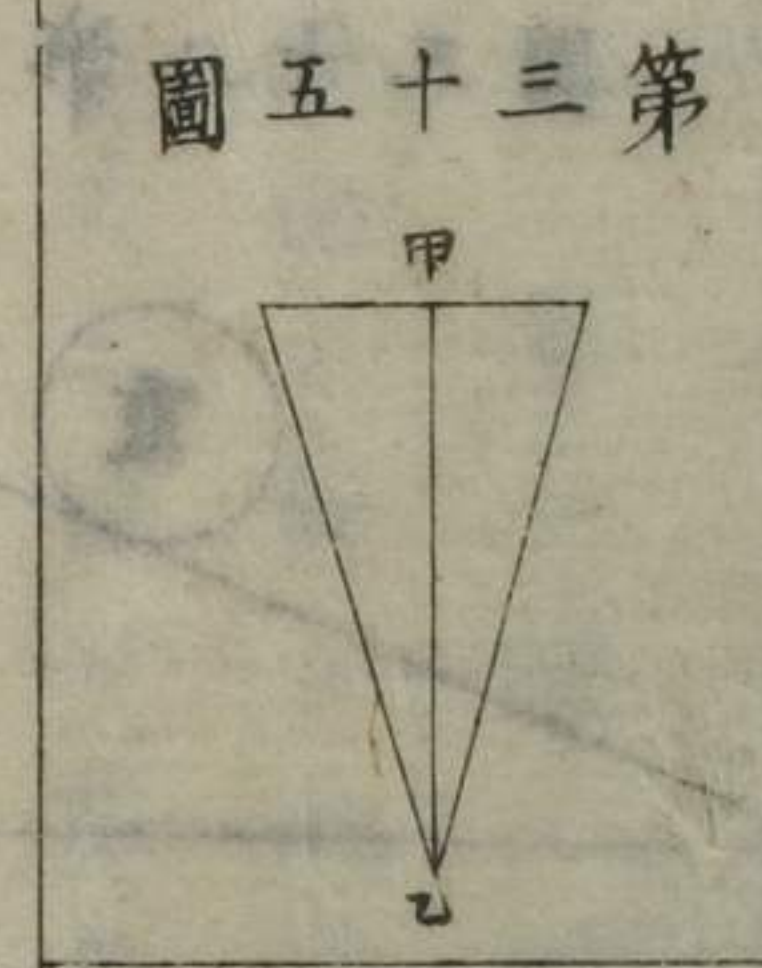


圖四十二第



三圖ハ斜面ヲ示シ、甲乙ハ其高  
サニシテ、乙丙ハ其長サナリ、又  
重ハ其面上ニ滑利シテ、提擡ス  
ヘキ重物ナリ、蓋平常見ル所ノ  
地窖ノ梯トシテ樽蓋ノ類ヲ上  
下シ、又高處ニ重物ヲ運スルニ、  
斜ニ艦板ヲ架スル等皆此斜面  
ノ理ニ因リ、其甲乙ノ高サ大ナ  
ルニ從ヒ、亦甲丙ノ長サヲ大ニ  
爲ストキ能ク重物ヲ運スヘシ

例ハハ甲乙ヲ一丈二尺ノ高サトシテ、甲丙ヲ三丈六尺ノ長サトスルカ如キ、十二斤ノ力、能ク三十六斤ノ重物ヲ推スニ足ル鑿若クハ一方平面ニシテ、一方傾斜ナル、剪刀ノ類、皆此理ニ原ツク、楔ハ兩斜面ヲ合セタルモノニ似テ、第三十五圖



第三十五圖

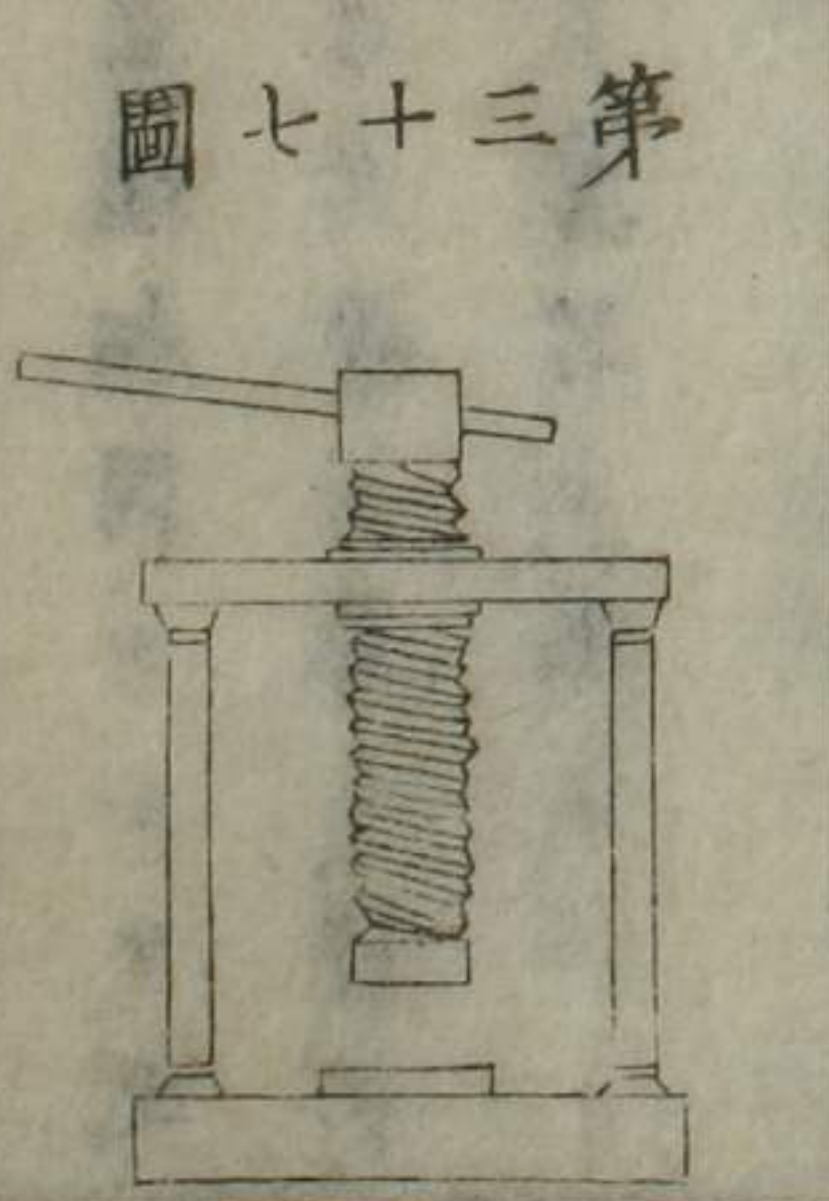


第三十六圖

ヲ合シ楔ト爲レテ他力ノ能ク裂キ得サル岩石

ニ示ス所ノ器、是ナリ、其用ハ甲乙ノ一線、即兩斜面ノ下底ヲ示シ、之

木材リ類ヲ裂クノ便ニ供ス、又此器械ヲ用キル時ニ當リ力勢ヲ加フルニ、槌若クハ他物ヲ以テスルモノアリ、斧、鉞、刀、釘、其他兩邊ヲ尖ラシタルモノ、皆此楔ノ理ニ藉リテ製ス、螺旋ハ兩器ヲ合シテ成ル者ニシテ第三十七圖ノ如ク、其一ハ圓柱ニ、葛藤狀ノ凸條ヲ絡ヒ、之ヲ陽螺旋ト云ヒ、他ノ孔ハ此圓柱ヲ容ル、カ故ニ、其周邊ニ亦螺旋狀ノ凹條ヲ鑄ス之ヲ陰螺旋ト云フ、蓋此器ハ猶柱



第三十七圖

改正  
手  
大

ノ周邊ニ、斜面ヲ絡ヒタルト其理相同クレテ、之  
ニ力ヲ加フルニハ、手ヲ以テ之ヲ推シ卷キ、若ク  
ハ柄ヲ設ケテ旋轉セシメ以テ其用ヲ爲ス、

第十一課 摩軋論

地面或ハ他ノ面上ニ於テ物ヲ移動セントスル  
ニ、二物ノ面彼此相軋シテ起ル所ノ抗抵アリ、之  
ヲ摩擦ト曰フ、今其摩擦ヲ分チテ二種トシ、一ヲ  
轉摩ト名ゾケ、一ヲ軋擦ト名ツク、即轉摩ハ圓體  
ヲ面上ニ轉スルヨリ起ルモノニシテ、例ハ、鏡  
丸ヲ地面ニ轉ロハシテ終ニ停止スルカ如キ是

ナリ、又軋擦ハ物體ヲ曳キテ滑過スルニ起リ、例  
ハ、地上ニ木材若クハ石ヲ曳クカ如シ、此摩擦  
ヲ防クハ轉摩ヨリ更ニ難シトス、蓋常時器械ノ  
力ヲ算定スルニハ必、此摩擦ヲ減セサルヘカラ  
ス、而シテ諸般ノ器械、各異ナル所アリト雖モ、摩  
擦ノ害ヲ算スルニ大約器械力三分ノ一ニ居ル  
モノ之ヲ通常トシ、且其兩物相接シ摩擦スル所  
ノ面、粗糙ニシテ大ナルトキハ其害多ク、平坦ニ  
シテ小ナルトキハ其害少ナシ、故ニ其面ヲ平滑  
ニナシ若クハ油ヲ塗リテ其摩軋ヲ減スヘシ、例

改正勿里各第 卷上 手三 故部省

ハ、氷或ハ他ノ平滑ナル密體相接スルカ如キ  
ハ、摩擦甚少ナレト雖モ、若、兩面相接スル間ニ灰  
若クハ砂等ヲ投入スルトキハ、其摩擦ヲ増加ス  
ルニ因リ以テ其理ヲ覺知スヘシ、

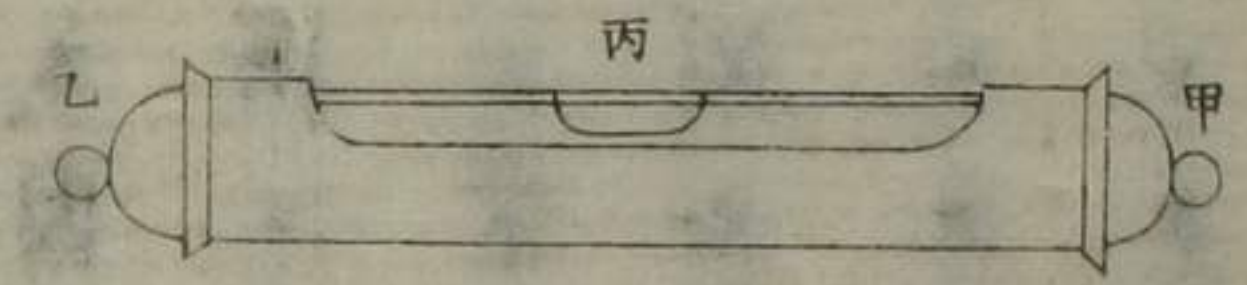
第十二課 静水論 又秤水學

静止スル水及諸液類ノ本性ト、重力及壓力トヲ、  
論スルモノ之ヲ秤水學ト曰ス夫、水ハ一部ノ水  
素ト八分ノ酸素トノ抱合ニ成レルモノニシテ、  
色味香臭ナク、又其分子ノ互ニ結合スル凝聚力  
薄弱ナルカ故ニ、微シク之ニ觸ル、トキハ、分子

相離レテ、輒ク流搖スルノ性ナリ、蓋、諸融液體中、  
水ヲ以テ首トシ、乳、油、酒、醋、麥酒、及火酒ノ類之ニ  
次キ、皆軟滑轉滴ノ質アリテ、能ク動クト雖モ動  
クニ定度アリテ、静止スルトキハ、其上面必、地平  
ヲナス、因リテ之ヲ水準ト名ツク、若、他物ノ來リ  
妨クルコトナキトキハ、其分子互ニ相平均レテ  
静止レ、常ニ平準ヲ爲サ、ルコトナレ、今爰ニ水  
準ヲ測ルニ器アリ、驗水準器ト名ツク、其最モ簡  
易ナルモノハ、ビイトロノ玻璃管ノ兩端ヲ密封シテ、淨水ヲ  
満タシタルモノヲ用井ルコト即、第三十八圖ノ



圖八十三第



如レ、而レテ此器ヲ取りテ、地上ニ置  
クニ、地若平坦ナラズレテ、管ノ一端  
他ノ端ヨリ降ルトキハ水走リテ、必  
低處ニ赴ムク故ニ此器ヲ用非テ地  
ノ平否ヲ測定スヘシ、圖中**甲****乙**ハ玻  
璃管ニシテ**丙**ハ水ナキ處ニ充ツル  
空氣ノ泡ナリ、此管ノ兩端、平準ニ居ルトキハ、泡  
止リテ、中央ニアリト雖モ、若レ其一端ヲ微ニ傾  
クレハ、水ハ直ニ降り之ト交換シテ、泡ハ他端ニ  
昇ルヘシ、是木匠、土工、量地家等常ニ木板、若クハ  
ダイク、サウリン、チャウケンカ

銅櫃ノ上ニ安置シテ用井ル所ノモノナリ、  
固形體ハ分子集合シテ、其全形ヲナスニ、凝聚力  
又之ヲ中央ニ引キ以テ能ク其一塊ヲ維持シ、其  
重量ノ如キハ、重心ト名ツクル一點ニ集マルモ  
ノナリ、今之ヲ推レテ、融液體ノ分子ヲ各自ニ重  
量ヲ保持シタル一塊ト定メ、因リテ、其固形體ト  
重カヲ異ニスル、所以ヲ考フルニ、一體ノ水ヲ取  
リ、之ヲ高處ヨリ落ストキ、其水ノ衝突シタル體  
ノ受ル所ノ害、同容ノ固形體ヨリ、受クハ所ノ害  
ニ比フルニ其少キヲ以テ了知スヘシ、然レトモ

水若凝リテ氷トナリ凝聚カノ加ハルニ因リ、分子結合シテ、一塊ヲ爲スニ至ルトキハ其落ル勢極ノテ大ナリ、

融液體ノ歴カハ固形體ノ如ク唯下歴ノカアルノミニ非ス上下左右ノ別ナク、周圍平等ニ分及シテ一方ニ偏セサルモノナリ、故ニ其勢ヲ妨クル者ナケレハ、分子常ニ平等ニ止リテ動カスト雖モ若觸レテ之ヲ動カストキハ、其平等ヲ失ヒ、再平均ヲ得テ、其故ニ復スルニ至ルマテ動キテ止マサルハ、今其下歴ヲ試ルノ方水ヲ一桶

充テ假ニ三層ト定ムルニ、第一層ハ第二層ヲ歴シ、第一第二ハ第三層ヲ歴シ、第一第二第三ハ桶底ヲ歴ス、此其全カナリ、故ニ層數多ケレハ、從テ、亦其重ヲ増加ス、總ヘテ液體ハ、分子疊積ノ高底ニ應シ、其歴カノ強弱ヲ知ルヘク、且其傍歴モ亦水面ヨリ水底ニ至リ漸ニ増加ス、例ヘハ水ヲ一筒ニ充テ其側面ニ孔ヲ穿ツカ如キ、水其孔ヨリ射注スルニ因リ以テ了知スヘシ又兩端開通ノ硝子管ヲ取り、水ノ上歴ヲ試ルニ塞子若クハ指ヲ以テ其一端ヲ密ニ塞キ、他ノ一端ヲ水中ニ沈

改正 物理階梯 卷上 五五 大野館

ムルトキ、水管中ニ入來ルコトナシト雖モ、若シ其塞子ヲ除キ、或ハ指ヲ放ツトキハ、水忽ニ管中ニ上進シ、管外ノ水ト平準ヲ得テ、然ル後止ムヲ見ル、是其上壓ノ徵ナリ、

第十三課 水壓論

前條ニ論スル如ク、融液體ノ壓力、其上面ヨリ直下スル所ハ深淺ニ應レテ強弱アリ故ニ、水益深クレハ壓力益大ナリ、即チ之ヲ試ルニ、膀胱ニ空氣ヲ充テ、其口ヲ紮リテ之ヲ水中ニ沈ムルトキ、水ノ壓力、其全面ヲ壓シテ、其容必縮小シ、且之ヲ沈

ムルトコト、愈深ケレハ、壓力愈加リ、更ニ其縮小ヲ増スヘシ、又塞子ヲ以テ密ニ塞キタル空虛ノ壘ニ石ヲ繫キ、之ヲ海中ニ沈ルニ、水ノ壓力、其塞子ヲ推シ、水壘中ニ攪入スルニ非レハ、其壘必破裂スヘシ、然ルニ、若シ壘ニ滿ツルニ、水若クハ他ノ液類ヲ以テスルトキハ、其壘取ヘテ損害セサルモノハ、是壘中ノ水壓、外邊ノ水壓ト齊シキ平均ヲ得ルニ因レリ、又桶或ハ筒ニ、水ヲ盛リ、側面ニ、二三ノ孔ヲ穿チテ、水ヲ其孔口ヨリ注射セシムルニ、下孔ノ射勢、上孔ニ比スルニ、甚急ナリ、第三十

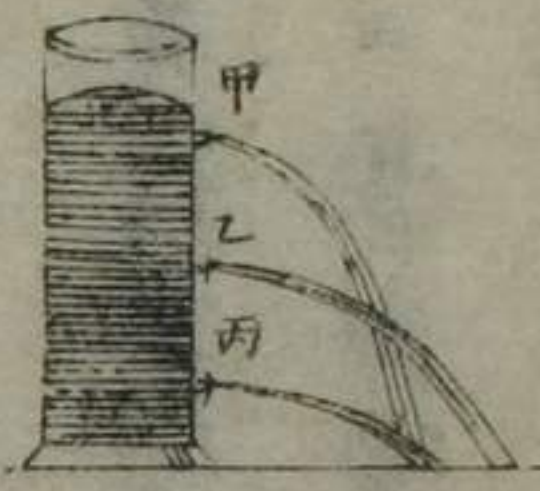
改正 物理學 卷一

五

文部省

九圖、地平ノ面ヨリ、三層ニ分チ、孔ヲ穿テタル

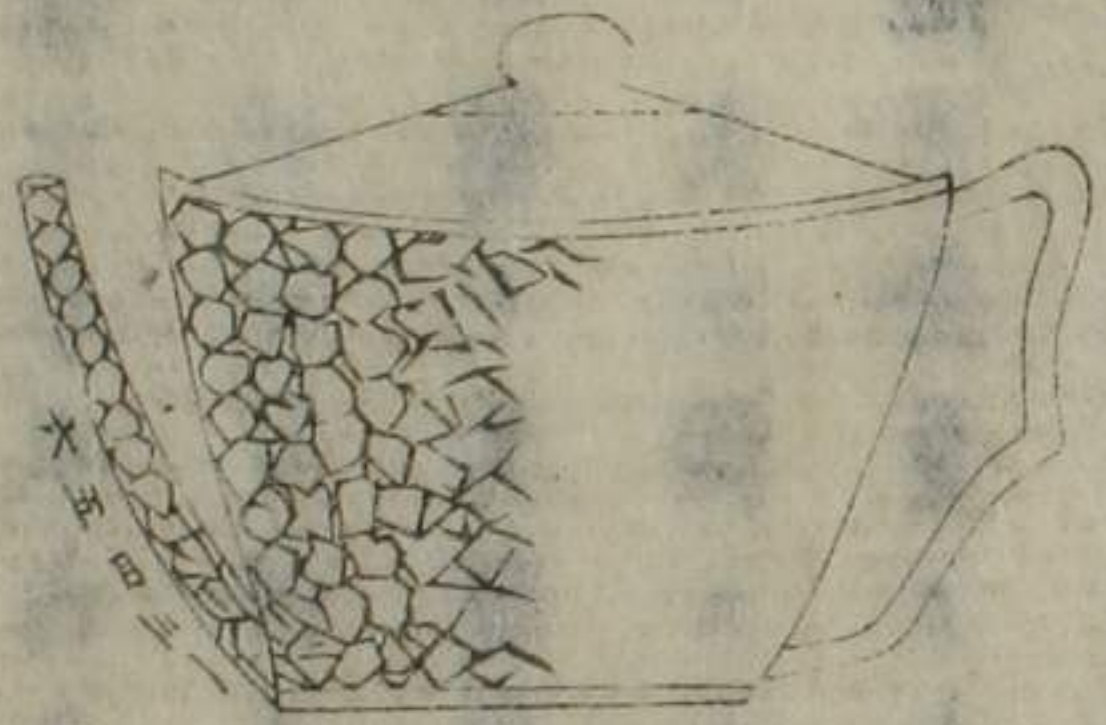
第三十三圖



器ニシテ、其水ノ曲線狀ヲナシ注  
射スルハ、重力ノ致ス所ニシテ、其  
下壓ノ如キハ水勢ノ深淺ニ應シ  
射勢ニ異同アルヲ見ル、即上層ノ

壓力ハ、弱小ナルヲ以テ、**甲**ノ射勢ハ強カラズ、**乙**  
ニ在テハ、上層ノ壓力加ハリ其射勢強ク、**丙**ニ於  
テハ、愈強シ、又今水ヲ嘴アル瓶ニ盛ルニ、其水必  
瓶嘴ニ昇リ常ニ瓶内ノ水準ト敢ヘテ毫釐ノ差  
異ヲ爲スコトナキヲ見ル、是瓶底ノ水ハ、其分子

第十四圖



改正  
物理學

上層分子ノ壓力ヲ受ケ更ニ下壓ヲ欲スト雖モ、  
既ニ其底ニ限ラレ止リテ外ニ出レコト能ハス、  
故ニ更ニ其向ヲ所ヲ變換シテ瓶嘴ニ赴キ昇ル  
ニ因レリ即第四十圖瓶内ノ小球ハ積疊スル水  
ノ分子ニ象ルモノニシテ、其瓶  
底ニ於ケル**一**ノ分子ハ**二**ノ分  
子ノ壓ニ因リテ瓶嘴ニ入り、**三**  
ト接シテ、之ヲ上ニ壓シ**四**又**四**  
ヲ壓シテ次ヲ逐ヒ**四**ヨリ**五**  
ヨリ**六**ト次第ニ昇ルカ故、瓶嘴

一條ノ水瓶内全量ノ水ト平準ヲ得テ、流出スル  
 コトナシ、是以テ水ノ壓力ハ、全ク分子積疊ノ深  
 淺ニ屬シ、其廣狹ニ屬セサルノ理ヲ悟ルヘシ、又  
 水ハ上ニ論スル所ノ理ニ因リ、其量少ナリト雖  
 モ他ノ全量ノ大ナルモノト、相均重シ、其勢ヲ同  
 一ニセサルコトナシ、之ヲ驗スルニ器アリ、ハイ  
 ドロスタチック、バルロウト名ヅク、即第四十一圖  
 ノ如ク、**甲** **乙** **ハ** **七** **八** **分** **四** **方** **ノ** **鐵** **管** **ニ** **シ** **テ** **丙** **丁** **戊**  
**己** **ハ** **六** **七** **寸** **四** **方** **ノ** **水** **櫃** **ナ** **リ**、**此** **水** **櫃** **ハ**、**其** **上** **板** **ト**  
 下板ノ間ニ皮若クハ樹膠織ヲ以テ、通常ノ鞴ノ

第四十一圖



如ク、上板ノ昇降ス、自  
 在ニ製シ而レテ、今若  
 此鐵管内ニ一斤ノ水  
 ヲ注クトキハ、水櫃ノ

上板ニ在ル、六十四斤ノ鐵錘ヲ舉クヘク且此鐵  
 管彌セマヤ窄小ニシテ長ケレハ同量ノ水ヲ以テ、其揚  
 起ノ力愈大ナルヘシ、鐵管濶大ナレハ之ニ反ス

第十四課 諸體本重 又各種重力

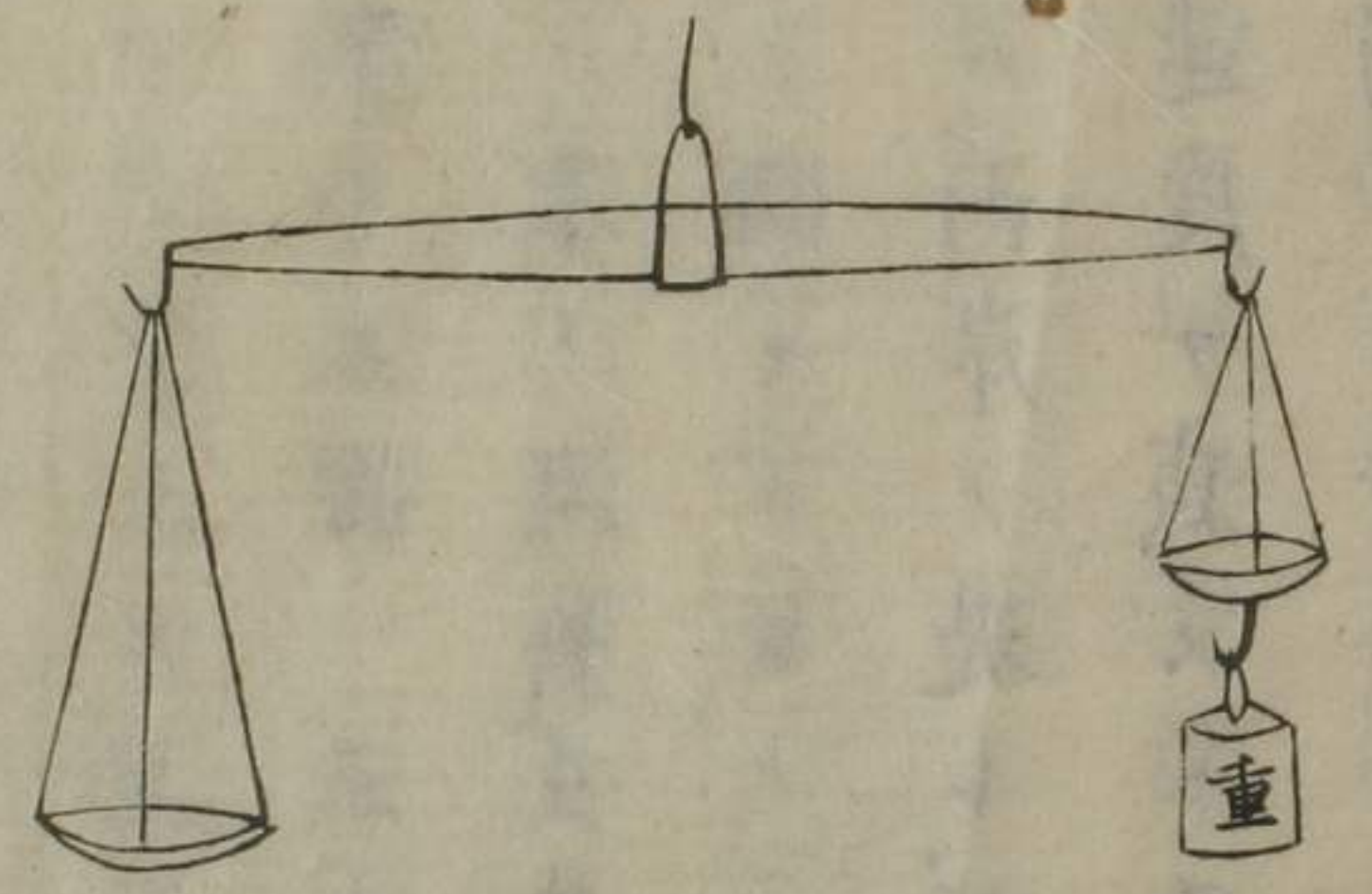
物ノ輕重ヲ稱量スルニ、雨水若クハ蒸溜水ヲ取  
 リ其重量ト其水同積ノ諸體ノ重量トヲ比シ、以

改正の... 手八 文部省

增補の玉附本

テ本重ヲ定ルコトヲ得ヘシ、例ヘハ一斤ノ水ト  
同容ノ鉛ヲ取り、之ヲ稱スルトキ、鉛ハ水ヨリ十  
一半重キヲ知ル、故ニ鉛ヲ水ニ比シテ、其本重ノ  
十一半倍アリト定ルカ如シ、又今水ヲ盛リタル  
器中ニ或ル體ヲ沈ムルトキハ、其體精密ニ同容  
ノ水ヲ排除ス故ニ其體ノ本重ヲ知ント欲セハ、  
先之ヲ稱リシ後更ニ其體ヲ水中ニ入レテ復之  
ヲ稱リ水中ノ減度ヲ以テ之ヲ除スヘシ即第四  
十二圖ハ物ノ本重ヲ稱量スル天秤ニシテ、一方  
ノ秤盞ハ一方ヨリ短ク、其下ニ鉤アリ、若物ノ本

第十四圖



九ヲ除スルトキハ、十九ヲ得ルカ故、黄金ノ本重  
ヲ、水ニ比シテ、十九倍ノ重トス、然レトモ諸體ヲ

重ヲ求メニトスルトキ  
ハ、其物ヲ此鉤ニ懸ケ之  
ヲ水中ニ入レテ稱ル可  
シ、例ヘハ黄金十九匁ナ  
ルトキハ、之ヲ水中ニ稱  
ルニ、其重量減レテ、十八  
匁トナリ一匁ノ減度ヲ  
見ル、因リテ一ヲ以テ、十

改正  
物理  
卷七

五九

文部省

水ト相較スルニ、或ハ水ヨリ重キモノアリ、或ハ  
輕キモノアリテ、又其輕重相同シキモノアリ、故  
ニ其重キモノハ沈ミ、輕キモノハ浮ヒテ、相等シ  
キモノハ、浮ハス沈マス常ニ水ノ中間ニ在リ、

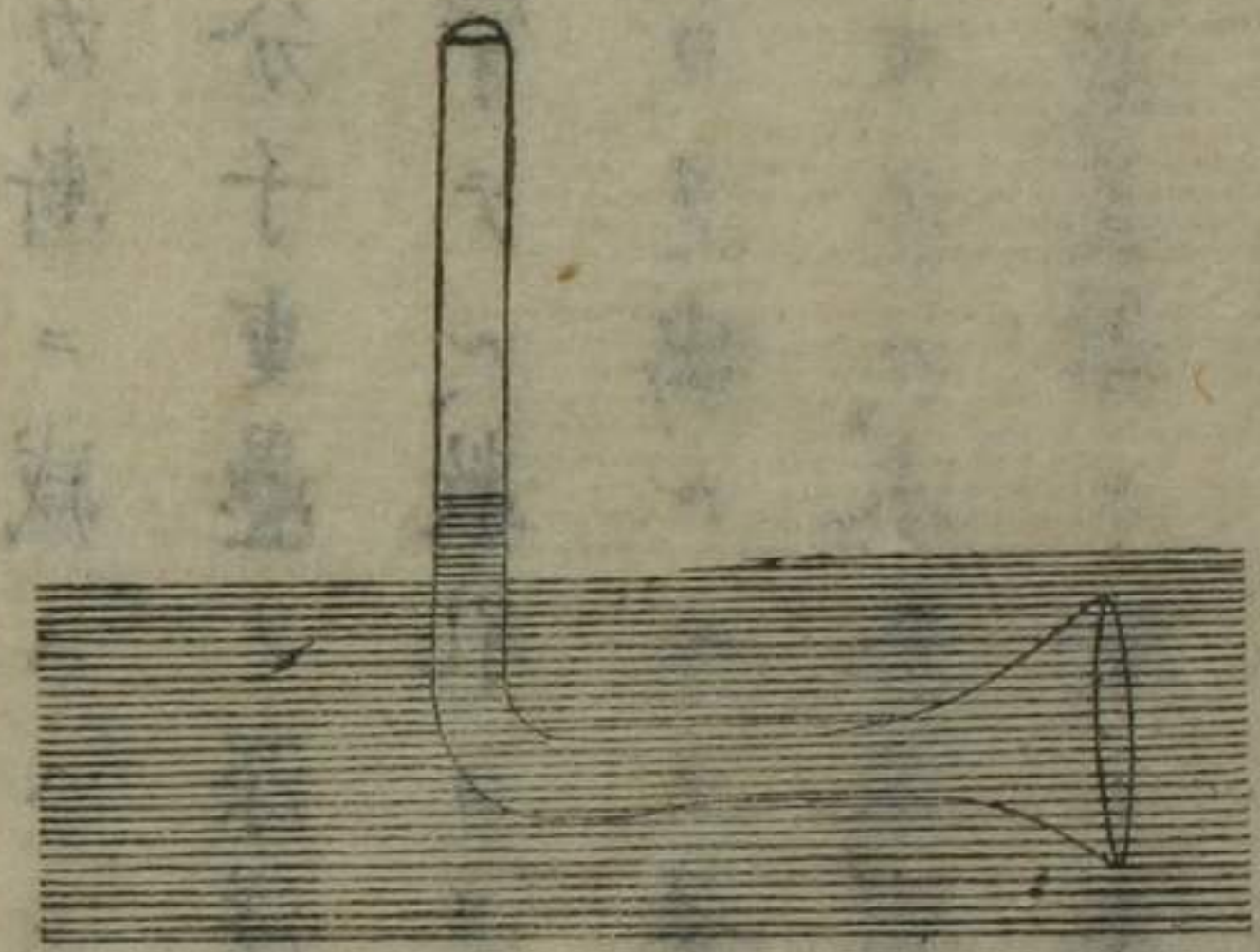
第十五課 流水論

此條ハ、水ノ流動、及其動ニ關涉スル、諸種ノ器用  
機關ヲ論セルモノニシテ、壑或ハ川等ノ流通ス  
ル水ハ、兩岸ノ堤ト、下底トニ、接スル所、其摩擦ニ  
因リ速度ヲ減スト雖モ、中央ニ在リテハ、其上面  
常ニ觸ル、所ナキカ故ニ其速他部ヨリ急ナリ

又前條第三十九圖ニ示スル圓筒ノ側面ヨリ、注射  
スル水ノ如キ、相繼キテ水ヲ充足スルニ非サレ  
ハ、其速力、漸ニ減スヘシ、是ニ因リテ、左ノ則アリ、  
水壓ハ分子重疊ノ深淺ニ應ス、說前ニ故ニ器ノ  
側面ニ穿テル、數孔ヨリ射注スル水ハ其中央ニ  
近キ孔ヨリ出ルモノ最モ遠ク、逆射シテ下孔ヨ  
リ出ルモノハ、水勢未盡サルニ、既ニ地上ニ達ス  
ル故ニ若其器ヲ更ニ高處ニ移サハ、射勢急ニシ  
テ、愈速ク逆射スヘシ、今流水ノ速力ヲ測ルニ、一  
端ヲ濶クシ、他端ヲ窄クシテ、漏斗ノ如ク、造リタ

ル曲管ヲ流水中ニ置クニ、第四十三圖ノ如ク濁

第四十三圖



キ一端ヲ流レニ向ハシ  
ムルトキハ水其管中ニ  
壓シ昇リテ、外邊ノ水面  
ヨリ高ク上射ス、因リテ  
其高低ニ應シ、以テ流水  
ノ緩急ヲ測定スルヲ得  
ヘシ、故ニ此測器ヲ以テ  
一川其處ヲ異ニシ、或ハ時ヲ異ニシテ、水ノ速力  
ニ緩急アルヲ測リ、又二三ノ流水ヲ比較シテ、其

速度ヲ定ム又名チメー卜螺旋器ト云フモノアリ

リ、水ヲ高處ニ上スル器械ニシテ、亞非利加ノ埃

土地方ニ於テ、土地ヲ膏腴ナラシムル爲ニ之ヲ

使用ス、其器ハ大約紀元前二百年ノ頃理學ノ大

家アルチヒード氏ノ發明ナルニ因リ、此名アリ、

即第四十四圖ノ如ク、一管或

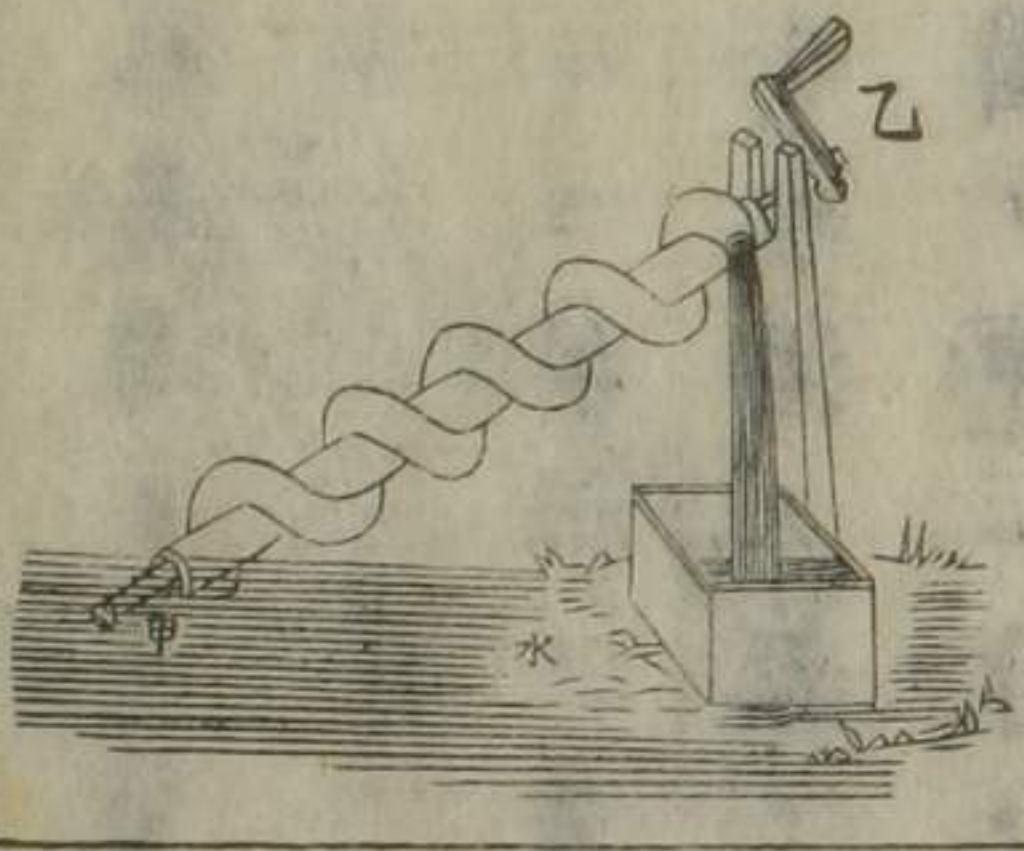
ハ二管ヲ圓柱ニ絡ヒ、螺旋形

トナシテ之ヲ支柱ニ懸ケ、乙

ノ曲柄ヲ把テ、甲ノ軸ヲ旋轉

セシムレハ、管ノ下端水中ニ

第四十四圖

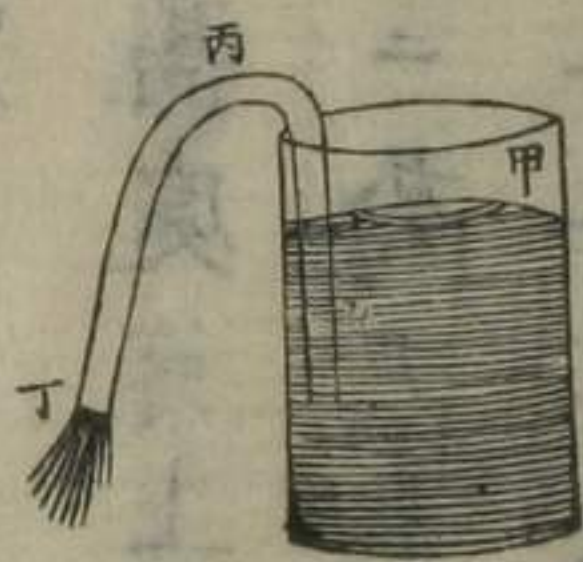




入り、水其端ヨリ、管中ニ屢昇シテ上端ヨリ流出スヘシ、

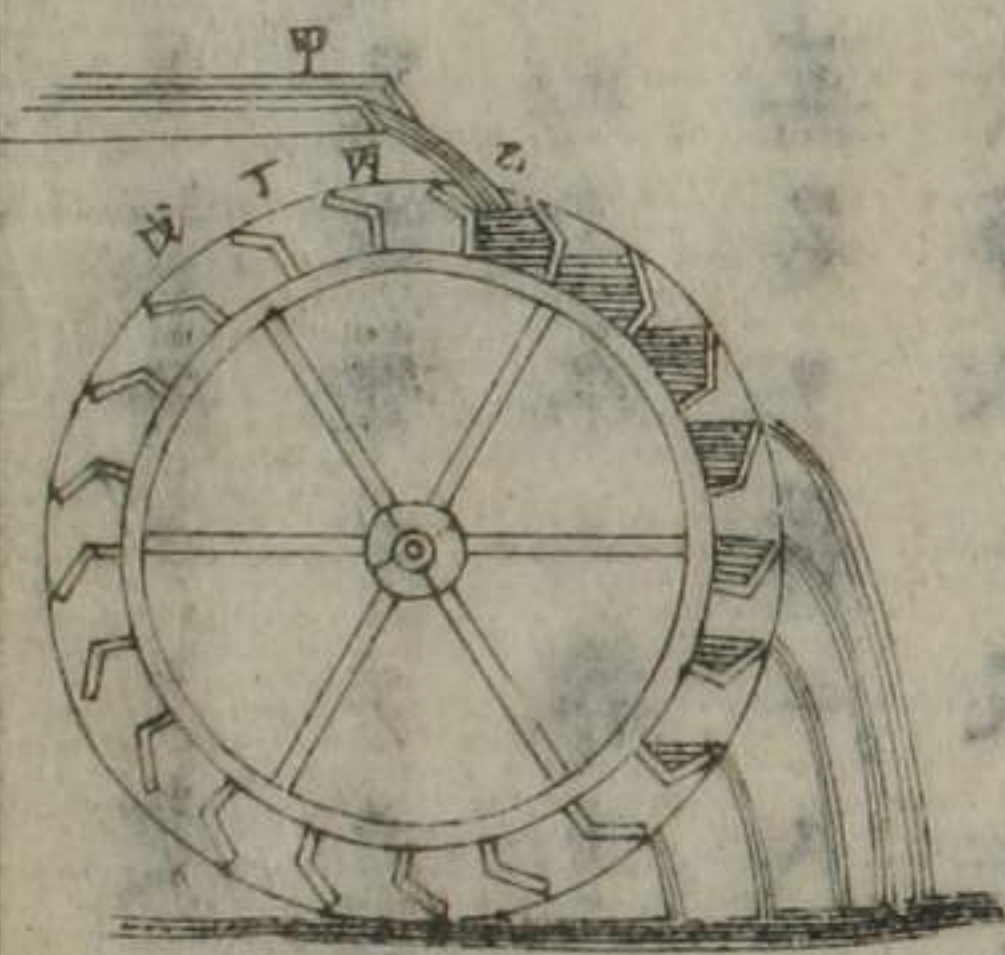
水角ハ、つ字形ノ曲管ニシテ、其用一壺、若クハ一桶ヨリ、水酒ノ類ヲ他器ニ移スノ器ナリ、即第四十五圖ノ甲ハ水ヲ盛リタル壺、或ハ桶ニシテ乙

第四十五圖



丙丁ハ、曲管ナリ、蓋其乙ノ一端ヲ、桶ノ水中ニ挿ス、**丁**端ヲ吸フトキハ、水**乙**ヨリ入り、**丙**ヲ經テ**丁**口ヨリ出テ桶中ノ水

第四十六圖



殆、盡ルニ至ルマテ流出止マズ、此器ヲ用井ルニ當リテハ、**丁**ノ一端長クシテ常ニ水面下ニ在ラサレハ久レク注射セス、水ヲシテ、器械ノ力ヲ起サシムルニ、數件アリ、水車又其一ニシテ、第四十六圖ノ水車ハ**甲**桶ヨリ**乙**ニ水ヲ注キ、既ニ充レハ其重力車輪ヲシテ、旋轉セシメ、**丙****丁****戊**代來リテ、水ヲ受ケ、漸ニ降リテ、水漸ニ減レ、愈降リテ、水

增補牛馬階梯

全ク盡キ、復昇リテ、更ニ甲樋ノ流水ヲ受ク、蓋水車ノ製、又數種アリテ、此ノ如ク上ヨリ水ヲ注クアリ、下ヨリ水ノ推スモアリ、其水ノ來ル所ニ從ヒ、各其名ヲ異ニス、

風起リテ、海水ヲ吹キ、氣水互ニ相摩スレハ、水面之カ爲ニ高低ヲ起スモノヲ、波濤ト曰フ、又諸泉河ハ、其源、雨雪霜露等ハ、地中ニ入リ降リテ、浸濕スヘカヲサル物質上ニ、滲狀重積シ、更ニ水路ヲ求ルニ、因リ湧キテ池泉トナリ流レテ江河トナリ、蓋ハチ更、且水ハ無處ニ滯ラサルハ、流動ノ原

由ニシテ、井泉ノ噴出、江河ノ奔流アルモ、亦之カ爲ナリ、蓋水勢ニ藉リテ、諸機關ヲ製シタルハ遠ク古代ニ創リ近世ニ至リテ益、改正ヲ加ヘ、且新發明アリテ、重要ノ用ニ供スルニ、資財ヲ費サスレテ、其用甚大ナリ、又水ハ動植ヲ滋養スルノ一大要物ニシテ、一日モ欠クヘカラサルコト、童子モ、亦能ク知ル所ナレハ、其詳解ノ如キハ、之ヲ他日ノ學ニ讓ラレノミ

改正勿里自第

卷

六

增補物理階梯卷上

辻士革校

羽山庸納畫

神原芳野重校

改正增補物理階梯卷之上終

